

JFA100周年記念事業
NPO法人サロン2002 公開シンポジウム2021-②



JFA100周年 2021年の総括と展望

—TOKYO 2020、WEリーグ、そしてコロナ後へ—

主催：特定非営利活動法人サロン2002
後援：公益財団法人日本サッカー協会
日時：2021（令和3）年12月11日（土）
15時30分～18時00分
会場：ZOOM

お申し込みはこちら



無料
オンライン

東京五輪・パラ開催

サロン新聞

令和3年（2021年）12月11日（土）

祝！

JFA100周年
新聞

第302号
NPO法人
サロン2002

WEリーグ開幕
#これは新しい日本のキックオフだ

現役最年長
スポーツジャーナリスト

賀川 浩

JFA100周年にあたっていと思うこと

日本クラブユースサッカー連盟会長

加藤 寛

WEリーグ創設とこれからのサッカー環境

読売新聞社編集委員兼
オリンピック・パラリンピック室

川島健司

TOKYO2020をめぐる報道を中心に

NPO法人サロン2002理事長 / 筑波大学附属高校

中塚義実

※コーディネーターを兼ねる

登壇者プロフィール

◆賀川浩(現役最年長スポーツジャーナリスト)

1924年、神戸市生まれ。神戸一中(現・神戸高)で全国大会優勝、神戸経済大(現・神戸大)で東西学生蹴球対抗王座決定戦準優勝、大阪クラブで天皇杯準優勝。52年、産経新聞入社。75年から10年間、サンケイスポーツ編集局長(大阪)。90年よりフリーランス。兵庫サッカー友の会(63年)、社団法人神戸フットボールクラブ(70年)創設メンバー。2014年、神戸市立中央図書館に神戸賀川サッカー文庫を開設。

ワールドカップ10回、ヨーロッパ選手権5回、南米選手権1回の取材経験を持ち、現役最年長スポーツライターとして2015年にFIFA会長賞受賞。著作に『90歳の昔話ではない。古今東西サッカークロニクル』(東邦出版)ほか。2010年、日本サッカー殿堂入り。

◆加藤寛(日本クラブユースサッカー連盟会長/NPO法人阪神ユナイテッド理事長)

1951年、岡山県生まれ。神戸市立葺合高校を経て大阪体育大学に進学。大学1年生のときに第1回FIFAコーチング・スクールでデットマール・クラマーの助手を務める。卒業後の73年に神戸FCコーチ就任。95年にヴィッセル神戸に移籍し、ユース監督、スクールマスター、普及部長、ホームタウン事業部担当部長、トップチーム監督を歴任。2009~17年は神戸親和女子大学教授・女子サッカー部監督。現在は日本クラブユースサッカー連盟(JCY)会長、神戸市サッカー協会副会長、特定非営利活動法人阪神ユナイテッド理事長などを務める。

1995年にJFA 公認S級コーチライセンスを取得。1977~98年までJFAナショナルトレセンコーチ。2012年より日本クラブユースサッカー連盟(JCY)会長を務め、インターシティ杯、TOWNCLUB杯、女子大会の創設など、男女を問わず、ユース年代のサッカー環境構築に尽力した。2021年4月より阪神ユナイテッドレディースの活動もはじまり、阪神地域において育成年代の女子のサッカー環境づくりに取り組む。父親は神戸FC創設者の1人である加藤正信。

◆川島健司(読売新聞社 編集委員兼オリンピック・パラリンピック室)

1963年、東京都生まれ。筑波大学附属高校を経て早稲田大学卒業後、1987年に読売新聞東京本社入社。宇都宮支局、地方部を経て、91年から運動部でサッカー、プロ野球、スキーなどを担当。97年から2001年にはロンドン支局で欧州のスポーツ全般取材した。FIFAワールドカップは男女合わせて計6大会取材。運動部長を経て14年3月から編集委員、17年9月より21年9月まで東京オリンピック・パラリンピック準備室長を兼務。21年10月から現職。TOKYO 2020の準備段階から本大会・大会後を報道の立場から見つめるとともに、全国高体連事業の共催社の立場から、全国高校総体、全国研究大会に携わる。国内外のさまざまなスポーツ現場を冷静に見つめるジャーナリスト。

◆中塚義実(筑波大学附属高校教諭/NPO法人サロン2002理事長)

1961年岡山県生まれ。大阪府立三島高校を経て筑波大学体育専門学群、同大学院修士課程修了後、1987年より現職。保健体育科教諭・蹴球部顧問として定点観測続行中。JFA科学研究委員会(当時)のサブグループであった「社・心グループ」の勉強会をルーツに、1997年度よりサロン2002の活動を開始。2014年度よりNPO法人化。また1996年度からは都内でユースサッカー「DUOリーグ」を創設。いまでは全国に広がるユースサッカーリーグの先駆けとなった。U-18年代のフットサル環境整備にも力を注ぐ。日本部活動学会理事、日本ヤタガラス協会副会長。

著書に『少年のためのサッカー入門』(長岡書店)、『日本のスポーツ界は暴力を克服できるか』(かもがわ書店)、『運動部活動の理論と実践』(大修館書店)など。



JFA100 周年と これからのサッカー環境

2021年9月10日、(公財)日本サッカー協会(JFA)は創立100周年を迎え、舞浜アンフィシアターでJFA100周年セレブレーションを行った。コロナ禍で規模を縮小しての開催となったが、JFA名誉総裁である高円宮妃久子殿下にもご臨席を仰ぎ、「100周年の記念日は、新たな100年に向かう出発点。未来を見据えた取り組みに高い志をもってまい進していただくことを切に願い、協会のますますの発展を心より祈念いたします」と、祝福と今後の発展を祈念することばをいただいた(JFA公式サイトより一部引用)

日本サッカーの統括組織は、日本のスポーツ界のリーダーとして、世界とつながり、これからの時代を切り開いていくパイオニアであり続けることが期待されている。

記念すべき100周年の節目にあたり、日本サッカーのあゆみを振り返っておきたい。そのはじまりは、JFA創設のさらに半世紀前にさかのぼる。

注)本報告は2021年12月11日(土)に開かれた「JFA100周年記念事業 特定非営利活動法人サロン2002公開シンポジウム2021-② JFA100周年 2021年の総括と展望-TOKYO2020、WEリーグ、そしてコロナ後へ」の内容のうち、日本サッカー史に関する部分を掲載するものである。同シンポジウムの概要についてはp.3を、発表者プロフィールはp.4をご参照いただきたい。

日本サッカーのあゆみ①

—JFA100周年にあたって

中塚 義実 賀川 浩



近代スポーツの伝来

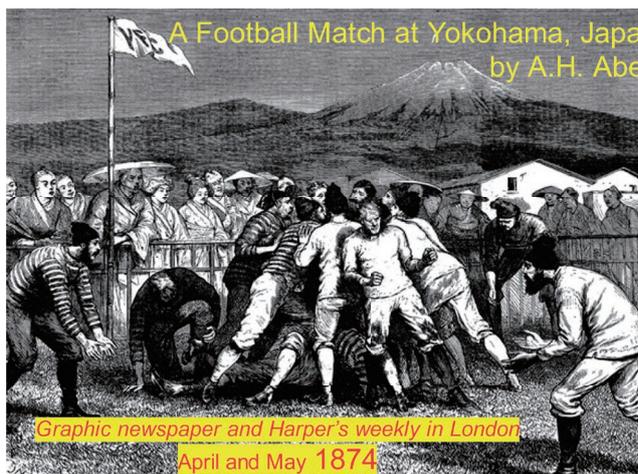
中塚：これは有名な絵画ですね。1874年にロンドンで紹介された日本の様子で、富士山が描かれています。YFC、横浜フットボールクラブの旗があります。どうやら外人さんがボールの奪い合いをしているところのようですが、当時の日本人からすると、「この人たちは一体何をしてるのだろう」ということかもしれません。サッカーもラグビーも、ルールが成立してまだ間もない頃、日本にやってきた人たちがフットボールをプレーし、その周りで当時の人たちが見守っているところが描かれています。

日本におけるスポーツの伝来は、一つは外国人居留地にクラブが生まれたことにあります。とくに横浜や神戸といった港町にはしっかりしたクラブができ、今に続いています。そして周りでみている人たちは徐々に外人さんがやってくるスポーツに触れていく。そういう流れが一つあるわけです。

そしてもう一つ、軍人や教師によって近代スポーツが紹介されます。いまの東京大学に来た英語の先生、ホーレス・ウィルソンがベースボールを紹介します。サッカーは1873年、築地にあった海軍兵学寮のダグラス少佐とその部下がサッカーをやったというのが日本における最初の記録とされています。

ただここからは広がっていきません。サッカーは学校を通して広がっていきます。学校教育に体操が導入されます。いまの体育ですね。導入されるには先生を育てないといけません。そのため体操伝習所ができ、そこで様々な遊戯が紹介されるわけです。

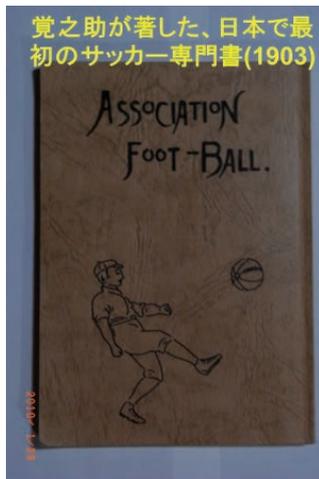
坪井玄道によって初めて日本にフットボール、サッカーが書籍の中で紹介されます。体操伝習所は東京高等師範学校体育専修科に改組され、その学校に、おなじみ嘉納治五郎校長が着任します。柔道の創始者、日本で最初のオリンピックIOC委員、日本のスポーツの統括団体を組織し多くの留学生を受け入れた嘉納は、東京高等師範学校、いまの筑波大



<http://www.zoomjapan.info/2018/11/22/no-66-focus-japan-home-of-rugby/>

日本へのフットボールの伝来

- ◆外国人居留地に“クラブ”が生まれる
1868(明治元)年 YC&AC(横浜外人クラブ)
1870(明治3)年 KR&AC(神戸外人クラブ)
- ◆軍人や教師によって近代スポーツが紹介
1872(明治5)年 野球伝来
1873(明治6)年 サッカー伝来
＝築地の海軍兵学寮にてダグラス少佐とその部下33名
- ◆教育制度が整えられ、「体操」が導入される
「体操伝習所」(1878～1885) さまざまな遊戯が紹介
1886 東京高師体育専修科に改組
※坪井玄道『戸外遊戯法』(1885)...フットボールを紹介
1893 東京高師に嘉納治五郎校長着任！



写真提供：中村統太郎/日本サッカーミュージアム

学の校長を長らく務め、スポーツの教育的意義を重視しました。

学校経由でサッカーが普及

一東京高等師範学校蹴球部の功績

中塚：この学校で、部活動としてフットボール部が19世紀の終わりぐらいにでき、初代主将・中村覚之助が中心となって初のサッカー専門書をまとめます。これが20世紀に入ってすぐのことです。

日本人がはじめてサッカーの試合に臨んだのは、東京高等師範学校がYC&AC（横濱外人倶楽部）に挑戦した試合で、日露戦争開戦直前の1904年2月6日。後列右から2番目の制服を着ている方が、中村覚之助です。3月の卒業でしたが、後輩のためにこの試合を企画し卒業していきます。



写真提供：中村統太郎/日本サッカーミュージアム

この学校の卒業生は、全国各地の師範学校や旧制中学校に赴任します。覚之助は中国の学校に着任しますが、若くして亡くなってしまいます。卒業生の進路をみると、愛知県、埼玉県、広島県、全国各地に赴任します。内野台嶺は豊島師範から東京高師に戻り、長らく蹴球部長を務めました。滋賀師範、御影師範、広島一中の名前も見えます。「いだてん」でおなじみの金栗四三の年代の方もいます。河本春夫は神戸一中…。この学校の卒業生が全国に赴任し、学校を通してサッカーが普及していったのが日本のサッカーの特徴です。あとで出てくる賀川さんや加藤さんの話とも関係しますが、神戸FCの存在は、このような、学校を中心とする流れとは異なり、学校ではないところでのサッカーの場づくりに一石を投じたということになります。まずは学校を通してサッカーが普及していったのが、日本の特徴だと言えるでしょう。

「赴任地にゴールポストを！」

- 明37(1904) 中村 覚之助 → 清国山東省済南府師範学堂
- 明39(1906) 堀 桑吉 → 愛知第一師範
- 明41(1908) 細木 志郎 → 埼玉師範
- 明41(1908) 牧野 信寿 → 広島師範
- 明41(1908) 内野 台嶺 → 豊島師範 → 東京高師
- 明42(1909) 落合 秀保 → 滋賀師範
- 明42(1909) 玉井 幸助 → 御影師範
- 明44(1911) 松本 寛次 → 広島一中
- 大3(1914) 高橋 英治 → 刈谷中
- 大9(1920) 北村 春吉 → 静岡師範
- 昭7(1932) 河本 春男 → 神戸一中

「いだてん」
金栗四三の
同期生

「学校」を通してサッカーが普及

JFA 創設 - 1921年9月10日

中塚：覚之助の後輩たちは日本にサッカーを広めるだけでなく、世界に立ち向かっていきます。1917年の極東選手権。日本代表が初めて編成されますが、このころサッカーをちゃんとやっていたのは東京高師しかないから、初の代表は東京高師のメンバーとなるわけです。



写真提供：竹内至著『日本蹴球外史』、1991年3月

中国とフィリピンと試合をしますが、いずれもボロ負け。この結果をみて、このままじゃいかんということで、首都圏、東海、関西で、いまで言うユース大会が開催されます。それを知ったイングランドのFAから、当時大日本体育協会会長であった東京高師の嘉納校長のもとに銀杯が届き、このFAカップを争奪する大会を行うための組織作りが始まり、嘉納の命を受けた東京高師蹴球部長の内野台嶺が中心となって大日本蹴球協会が設立されます。それが1921年9月10日。今年はそのから数えて100周年というわけです。



写真提供：日本サッカーミュージアム

日本にフットボールが来てから JFA ができるまでを、駆け足で申し上げました。もう少し進みます。

技術的にすごく影響を受けたのは、チョウディンさん。ビルマ、いまのミャンマーからの留学生ですね。この人が全国を行脚することによって、本物のインサイドキック、本物の壁パス、こういうのを学びます。そして、そこで学んだ早稲田高等学院が第1回旧制高校のインターハイで優勝します。1923年1月。この年の9月に関東大震災、そしてその翌年12月29日に、賀川浩さんがお生まれになるというところ。このあたりから賀川さんにお聞きしたい話になってきます。



写真提供：日本サッカーアーカイブ、日本サッカーミュージアム

1930年(昭和5年)前後のこと

中塚：1930年の極東選手権で初めて優秀選手を全国から選考し、鈴木重義監督、竹腰重丸主将で臨み、初優勝します。JFAのシンボルマークが決まったのはこの翌年です。ということで、1930年前後にとても大きな動きがあったのだということを感じます。

賀川さん、お待たせしました。1930年前後のことについてお話いただければと思います。



写真提供：日本サッカーミュージアム

賀川：僕は1924年生まれですから、まだ小学校に行くかどうかのころで、1930年のサッカーに関係したわけじゃないんですが、(神戸の)雲中小学校に入って3年か4年の時には皆がグラウンドでボール蹴ってました。昭和5年の極東大会は、全国に影響を及ぼしたと思うんです。国際試合というのは当時の日本にとってはびっくりするような事件です。最初の大会の時にはフィリピンにも勝てなかったのが、昭和5年の大会ではフィリピンに勝って中国と引き分けて、シーソーゲームで3対3になったものですから、試合を直接見に行った人たちはものすごく感激したんですね。非常に面白かった。今でも3対3で点の入れ合いをするとおもしろいですね。それがアジアのタイトルがかかった試合ということで、わずか3ヶ国しか参加しなかったけども、一応日本は中国と引き分けて、双方一位ということになっております。この大会を契機に、日本サッカーの組織もしっかりしたものになって、昭和11年のベルリンのオリンピックに参加して、ヨーロッパでも強かったスウェーデンに勝って、世界中をびっくりさせた。そのあたりから日本のサッカーが急速に国際化していく。いまからすれば国際化と言っても知れてますけど、えらい勢いで外国のことも知るようになり、サッカーの古い話もう一度勉強するようになります。昭和16年に、軍の関係で、あらゆる全国大会が、高校野球も全部なくなって、サッカーなども明治神宮大会のサッカーの一般の部に引き継がれて、それが戦後の全日本選手権につながってきます。

中塚：賀川さん、いま画面に映っている表をご覧くださいませんか。全日本選手権大会の第1回優勝は東京蹴球団。そこからずっと続いてきましたが昭和16年から戦争のため中止となります。右端の、日本フットボール大会からいまの高校選手権に繋がる大会も、1941（昭和16）年から中止です。戦前のこの時期、賀川さんは神戸一中でサッカーをやっておられたと思いますが、戦争による中止を体験なさったということですか。

賀川：そうですね。なんで大会がなくなるんだということ、非常にみながっかりしたり憤慨したりしたことを覚えてますね。もうそのころは、神戸でも旧制中学はそんなにたくさんないんですけど、その旧制中学のグラウンドで、サッカーをするということは日常のことになっていましたね。

中塚：戦争の時期の話になりましたが、もう1回1930年のメンバー編成に戻りたいと思います。それまでは、どこかのチームを中心にして、補強選手を加えて日本代表を編成したと聞いていますが、この大会は、はじめて選抜チームを作って臨んだんですね。

賀川：昭和の初めのうちは、東京高等師範がサッカーの本家みたいなものですから、高等師範の系統の中学校が強くて、そういうところから代表チームを海外に送ったり、日本でやる国際試合にも代表が選ばれたりしました。しかし徐々に全国に広まって、特に広島ですね。第一次世界大戦があって、俘虜収容所が広島にでき、そこに何千人というドイツ人の俘虜が入りました。そのころドイツもサッカーが盛んですから、俘虜のサッカーのチームが非常に強く

て、そこへ習いに行くというようなことでした。東京高等師範のOBの方が、広島から俘虜収容所のある似島までサッカーを習いに行った。どういうわけか、日本陸軍の俘虜収容所が、習いに行く日本の学生のために船を出してくれて、広島はサッカーが盛んになって実力も上がっていく。関西では新聞社の主催で関西のチームが集まって大会をやったんですけど、関西のチームにとっても広島は強いチームの象徴みたいなものでしたね。

中塚：1930年のメンバーを見ると、出身大学は、ほとんど東京帝国大学。つまり東大が一番強かった時期ですね。

回	年度	優勝	準優勝
1	大10 1921	東京蹴球団	御影蹴球団
2	大11 1922	名古屋蹴球団	広島高師
3	大12 1923	アストラ・クラブ	名古屋蹴球団
4	大13 1924	鯉城クラブ	全御影師範クラブ
5	大14 1925	鯉城蹴球団	東京帝大
6	大15 1926	※大正天皇崩御のため中止	
7	昭2 1927	神戸一中クラブ	鯉城クラブ
8	昭3 1928	早大WMW	京都帝大
9	昭4 1929	関学クラブ	法政大学
10	昭5 1930	関学クラブ	慶応BRB
11	昭6 1931	東京帝大LB	興文中学
12	昭7 1932	慶応クラブ	芳野クラブ
13	昭8 1933	東京OBクラブ	仙台サッカークラブ
14	昭9 1934	※極東選手権準備のため中止	
15	昭10 1935	全京城蹴球団	東京文理大
16	昭11 1936	慶応BRB	普成専門
17	昭12 1937	慶応大学	神戸商大
18	昭13 1938	早稲田大学	慶応大学
19	昭14 1939	慶応BRB	早稲田大学
20	昭15 1940	慶応BRB	早大WMW
21	昭16 1941	※戦争のため諸行事中止	
22	昭17 1942	※戦争のため諸行事中止	
23	昭18 1943	※戦争のため諸行事中止	
24	昭19 1944	※戦争のため諸行事中止	
25	昭20 1945	※戦争のため諸行事中止	

回	優勝
1	早稲田大
2	東京高師
3	東京帝大
4	東京帝大
5	東京帝大
6	東京帝大
7	東京帝大
8	東京帝大
9	慶應義塾
10	早稲田大
11	早稲田大・慶應義塾
12	早稲田大
13	早稲田大
14	慶應義塾
15	慶應義塾
16	慶應義塾
17	慶應義塾
18	早稲田大・東京帝大
19	東京帝大
幻大会 (東京帝大)	
-	中止
-	中止

回	年度	優勝	準優勝
1	1917	御影師	明星商
2	1918	御影師	明星商
3	1919	御影師	姫路師
4	1920	御影師	姫路師
5	1921	御影師	神戸一中
6	1922	御影師	姫路師
7	1923	御影師	京都師
8	1924	神戸一中	御影師
9	1925	御影師	広島一中
-	1926	中	止
10	1927	崇実	広島一中
11	1928	御影師	平塚高
12	1929	神戸一中	広島師
13	1930	御影師	広島一中
14	1931	御影師	愛知一師
15	1932	神戸一中	青山師
16	1933	岐阜師	明星商
-	1934	中	止
17	1935	神戸一中	天王寺師
18	1936	広島一中	蕪崎中
19	1937	埼玉師	神戸一中
20	1938	神戸一中	滋賀師
21	1939	広島一中	聖峰中
22	1940	普成中	神戸三中
23	1941	※戦争のため中止	
24	1942	※戦争のため中止	
-	1943	中	止
-	1944	中	止
-	1945	中	止

第9回極東選手権優勝メンバー

ポジション	氏名	生年月日	出身中学	出身高校	出身大学	試合出場 フイピン 中華民国
監督	鈴木 重義	1902(明治35)年10月26日	東京高師附属中	早稲田高等学院	早稲田大	- -
FW	春山 泰雄	1906(明治39)年4月4日	東京高師附属中	水戸高校	東京帝国大	○ ○
	若林 竹雄	1907(明治40)年8月29日	神戸一中	松山高校	東京帝国大	▽ ▽
	手島 志郎	1907(明治40)年2月26日	広島高師附属中	広島高校	東京帝国大	○ ○
	篠島 秀雄	1910(明治43)年1月21日	東京高校尋常科	東京高校	東京帝国大	○ ○
	高山 忠雄	1904(明治37)年6月24日	神戸一中	第八高校	東京帝国大	○ ○
	市橋 時三	1909(明治42)年6月9日	神戸一中	慶応大予科	慶応義塾大	△ △
HB	本田 長康		東京高師附属中	早稲田高等学院	早稲田大	▽ ○
	竹腰 重丸	1906(明治39)年2月15日	大連一中	山口高校	東京帝国大	○ ○
FB	野沢 正雄		広島高師附属中	広島高校	東京帝国大	○ ○
	竹内 梯三	1908(明治42)年11月6日	東京府立五中	浦和高校	東京帝国大	○ ○
	井出 多米夫	1908(明治42)年11月27日	静岡中	早稲田高等学院	早稲田大	△
GK	後藤 勲雄		関西学院中		関西学院大	○ ○
	齊藤 才三	1908(明治42)年9月24日	桃山中		関西学院大	○ ○
HB	西村 清		神戸一中	松山高校	京都帝国大	
	大町 篤				東京帝国大	
FB	杉村 正二郎	1907(明治40)年8月16日	天王寺中	早稲田高等学院	早稲田大	
	近藤 台五郎		東京高師附属中	水戸高校	東京帝国大	
	岸山 義夫			第八高校	東京帝国大	
GK	阿部 麟二	1909(明治42)年1月27日		浦和高校	東京帝国大	

注)試合出場欄は、○フル出場、▽途中退場(交代)、△途中出場

賀川：当時は旧制中学でスポーツをやった連中が、旧制の高等学校、いまの学校制度にはありませんが、そこへ入りまして、これが帝大系の大学に入るために3年間、いわば大学の予科みたいな感じであったわけです。そこでどちらかというと大学よりは時間的な余裕があるものですから、旧制高等学校のサッカー、いまのインターハイとは違いますが旧制インターハイ、これが盛んになりまして、それがのちに優秀な選手が東大に上がるものですから、昭和5年あたりは東大が強くて、関東大学リーグでも東大が優勝する時代がしばらく続きます。



写真・資料提供：日本サッカーミュージアム

中塚：先ほどスライドにも出てきましたが、この旧制高校のインターハイの第1回優勝が早稲田高等学院で、チョウ・ディンの指導を受けた人たちだということですね。出身中学を見てみると、東京高師附属中、私が勤務している学校です。それから神戸一中、広島高師附属中の名前が見えます。いま言われたように、関西や広島の中学校の出身者が大勢います。はじめに賀川さんは雲中小学校の話がされましたが、例えば神戸一中に入る前に、少年の頃からサッカーをする環境ができていたところがあったということですか。

賀川：戦前は師範学校にサッカーが入って、師範学校でサッカーをやる生徒たちを見習って、当時どこの県にもあった師範学校の附属小学校はサッカーが強かったわけですね。私が育った雲中小学校は師範学校の附属でも何でもありませんけど、師範学校でサッカーを覚えた先生が、自分たちでサッカーをやったり、子どもたちにもサッカーを覚えさせたということから、西日本ではそういう経路でサッカーが盛んになっていきましたね。

中塚：ありがとうございます。こうして振り返っていくと、戦前は本当に学校しかスポーツ、サッカーをやる場所はなかったのです。そして、少なくともサッカーにおいては、旧制中学校、旧制高校、大学の中で、ごく一部のエリートの人たちではありますが、学校の中で育つ環境ができ上がっていたと言って間違いはないということですね。

賀川：そうです。やっぱり学校スポーツとして盛んになりましたね。

JFAのシンボルマークをめぐって

中塚：ちょっとこの話にも触れておきたいと思います。三本足のカラス、JFAのシンボルマークです。書き物として残っている資料は、機関誌『蹴球』第2号（1933年2月発行）に掲載された、「協会旗を日名子氏案に定む」というものしか見当たりません。その当時、内野台嶺さんを中心にこの図案が定められ、当時のスポーツ芸術の第一人者でもあった日名子実三がデザインしたとされています。賀川さん、このシンボルマークができた当時の思い出などがありましたらお願いします。

賀川：関西にいた者にとっては、協会がこういうものを作ったというのをね、けったいなマークやな、おもしろいマークやなど。色が黄色と黒ではっきりしましたので、見やすく、頭に入りやすかったと思います。三本足というところがおもしろくてね、誰か偉い人が、二本より三本の方がうまくできるやろうと考えたのだらうと（笑）、話題になってたんですよ。

中塚：八咫鳥という認識はありましたか。

賀川：それはもちろん。神武天皇の東征の時に、熊野に上がって、そこから山の東側に出て、山を越えて奈良に入っていくわけですね。そこがサッカーの歴史として面白いところだなと。とにかく西の方から船に乗ってやってきて、ぐるりと紀州を回って、上へあがって奈良、大阪へ入ったと。三本足のカラスもそういう歴史を背景にしていると思います。

中塚：去年、コロナが始まる前ですが、この三本足のカラスのシンボルマークを取り上げた芸術関係の人たちとのシンポジウムがありました。そこで、筑波大学名誉教授の成田十次郎先生、スポーツ史の大先生ですが、面白いエピソードを紹介してくださいました。デザインされた日名子実三はヨーロッパへ留学していますが、彼はワートルローの古戦場に立つライオンの丘の像を見たのではないかと。ライオンが押さえているは大砲の弾ですが、それを右足で押さえ、首をちょっとこちらへ向けている。JFA の図案と似ています。もしかすると日名子の発想の中にこういうのが関係しているのではないかとされたのですが、賀川さんはどのようにお考えですか。

賀川：その頃ヨーロッパでこういうのを見た人があるのか、こういう写真を見たことがあるのか、第一このライオンがボールを抑えている像がいつごろできたのか。そういうことをきちんと調べていくと面白いと思いますね。

中塚：ワートルローの戦いは 1815 年で、その数年後にはこの像ができていたようです。日名子実三が留学していたころにはこれは建っていたようです。

賀川：なるほどね。四本足のライオンが右の前足で押さえていますけど、こちらのカラスの方は二本しかないはずの足を一本増やして三本で押さえているの

は、誰が考えたか知りませんが傑作ですよ。

ベルリン五輪と戦中・戦後

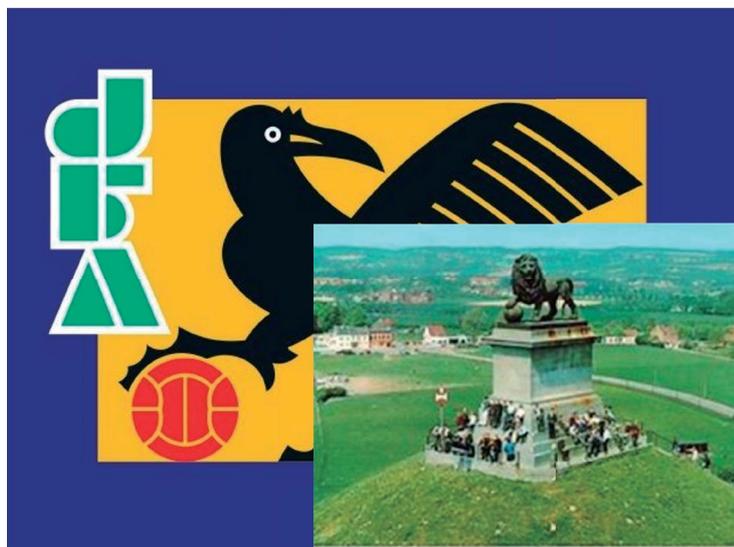


写真提供：日本サッカーミュージアム

中塚：先ほども賀川さんが触れてくださいましたが、日本はその後、ベルリンオリンピックに初出場します。朝鮮半島からもキム・ヨンシクが入り、そして、主に早稲田の人たちが中心になってメンバー編成され、優勝候補スウェーデンに勝利。しかしその後、戦争の時代に突入します。

先ほども見ましたが、戦争のために諸行事中止。そして敗戦。この大変な状況の中、昭和 21 年 5 月 5 日、全日本選手権が東大御殿下グラウンドで行われています。東大 LB と神戸経済大学クラブのメンバーに、賀川弟・賀川兄の名前があり、左ページには、賀川浩さんの「私の天皇杯」という文章も載っています。

この試合前後のことや、あるいは賀川さんは飛行機に乗っておられたとお聞きしています。そのあたりの戦時中の体験も含め、賀川さんと戦争とサッカーについてお話しただけではないでしょうか。



<https://www.pinterest.jp/pin/547680004654826474/>



JFA 発行、『天皇杯 65 年史』、昭和 62 年 5 月発行

賀川：私たちが戦争で一番大きな影響を受けたのは、ボールが配給制になって、年に 10 個ぐらいしか来なくなりましたね。神戸一中は 40 人の部員で、毎日 6 個か 8 個ぐらいのボールを出して、練習させましたから。それが、ボールがだんだんなくなるといことは、やっぱり困りましたね、ボールをちゃんと扱えることで、自分らより体の大きい連中に勝てるというサッカーをやってきたのが、ボールをちゃんと扱うための時間、ボールの数が減ってくるというのはものすごく大きな問題でしたね。ですから僕の仕事は、家へ帰ってからボールを自分で直すことばかりでした。今朝も、昔のことを考えていたら、私が大学の予科 1 年の時に何をしたかなというと、ボールの修繕以外にすることがない。自分が蹴るボールを自分たちで繕っていかなあかんということが始まりですね。いまから考えるとちょっとばかげたような話ですけど、それをしなければボールを蹴れなかったわけですから。

中塚：サッカー活動は、大会はなかったけど、皆さんボールを何とか蹴り続けようと言われていたんですね。

賀川：そうですね。戦争直後もそれを続けましたね。戦争中は、毎日新聞社主催の全国大会がその頃、夏にあったんですが、夏の大会がいろんな事情でいよいよなくなる。昭和 16 年には中止になったんですけど、ありがたいことに明治神宮大会だけはあったので、そこに僕らも出場することができて東京へ行きました。当時日本の国の一つであった朝鮮地方の普成中学、いまでも韓国にありますけど、そこと試合をして 2 対 2 の引き分けで神宮大会が終わったの

が昭和 16 年のことでしたね。その神宮大会が終わって 1 か月ほどして戦争が始まったんです。

中塚：なるほど。賀川さんご自身は、戦争の終わりの頃に徴兵されたとお聞きしましたが。

賀川：昭和 19 年の 6 月 1 日に宇都宮の陸軍の飛行学校へ入りまして、飛行機に乗って、戦争の終わりの時、昭和 20 年の 8 月は、いまの北朝鮮の海州（ヘジュ）という町の近所の飛行場に、特攻隊の演習をやっていました。

中塚：すると戦争がもう少し伸びていたら、戦地へ行って、という可能性もあったわけですね。

ありがとうございます。この辺りまでで加藤さん、川島さんから感想なりコメントをいただければと思います。加藤さんどうですか。

加藤：賀川さんありがとうございます。私も若いときに賀川さんから戦争中の話とかいろいろ伺ってました。私の父も軍医として海外へ行ってみたいみたいです。うちの父は、慰問袋の中にボールを、日本国内から送ってもらって、そして中国の子どもたちを集めて一緒にサッカーをして、軍隊が移動するときには、そのボールを子どもたちにプレゼントをしたという話を父から聞いて、「戦争の中でよくそんなことするよな」と思っていました。

もう一つは、賀川さんに以前お話を伺ったのは、賀川さんたちが一番お元気なときに、一番サッカーをやりたいときに戦争があったという歴史です。もちろん国の大きな歴史の流れの中ではどうしようもないことだったかもしれませんが、それが戦後の神戸 FC の創立に何か影響を与えてますかね。戦争が。

賀川：我々は戦後帰ってきてからも、幸い生きてたものですから、国内へ帰って 10 月中旬に京都の家に着いたら、サッカーの仲間から「10 月の何日にボール蹴るからバッグ持って出て来い」と連絡がありまして。もうやるんかいなという話で（笑）。それから学校へは顔を出さなくても西宮のグラウンドでボール蹴ってましたから。ですから戦後のサッカーの復活というものは早かったことは早かったですね。

加藤：すごいですね。いまの子どもたちに聞かせてやりたいような話ですね。いまの子どもたちはボール



デットマール・クラマー
 ・代表コーチ
 ・指導者養成
 ・全国への巡回指導
 そして、「4つの提言」
 ①日本代表チームの強化
 - 毎年ヨーロッパに遠征する
 ②トップレベルの全国リーグを作る
 ③指導者を養成する
 ④芝生のグラウンドを作る



写真提供：日本サッカーミュージアム
 (左下の写真は提供：中塚義実)

日本のトップの担い手となっていきます。そしてメキシコ・オリンピック銅メダル。一時的なサッカーブームが訪れます。しかし1970年代、私が中学・高校生の頃は、残念ながらワールドカップは雲の上。オリンピックも韓国にやられ、イスラエルにやられ、オーストラリアにやられ、全く出られなくなった時代でした。しかしその間も、サッカーを愛する人たちは各地で裾野を広げていきます。この時代の話、後ほど賀川さんにお聞きします。

裾野を広げるのにテレビが大きく貢献しました。高校選手権のテレビ放送。あるいは少年サッカーの普及。そしてクラブユースの存在。学校以外のクラブ組織が生まれたのは大きなトピックです。女子のサッカーも徐々に始まります。1970年代ごろから

1964年 東京オリンピック

1965年 日本サッカーリーグ創設

1968年 メキシコ五輪銅メダル

一時的に訪れたサッカーブームも、
 1970年代以降、世界への道は閉ざされ、
 サッカー界の低迷が続く...

しかしその間も、
 サッカーを愛する人々は各地ですそ野を広げ...

1963年12月29日 兵庫サッカー友の会
 1970年12月22日 社団法人神戸フットボールクラブ

です。漫画やアニメの影響もあるのではと思います。またテレビを通して世界のサッカーに触れる機会がありました。そして徐々にプロ化が進行し、アマチュアからプロへ。全日本ユース選手権も生まれて学校運動部とクラブユースの真剣勝負の場が生まれます。フットサルも始まります。

このような流れの中で、Jリーグ開幕（1993）、フランス大会出場（1998）。ワールドカップ開催（2002）。そしてなでしこジャパン世界一（2011）。そして2021年の今年、1年遅れの東京オリパラ開催、さらにWEリーグ開幕…。このような大きな流れになっていくわけです。

さて、賀川さんにここでもう一つだけお聞きしておきたいのが、神戸FC創設前後の話です。東京オリンピック後のムーブメントの中で、兵庫サッカー

(天皇杯)全日本選手権大会				
回	年度	優勝	準優勝	
26	昭21 1946	東大LB	神経大クラブ	
27	昭22 1947	※世情不安のため中止		
28	昭23 1948	※世情不安のため中止		
29	昭24 1949	東大LB	関大クラブ	
30	昭25 1950	全関学	慶応大学	
31	昭26 1951	慶応BRB	大阪クラブ	
32	昭27 1952	全慶応	大阪クラブ	
33	昭28 1953	全関学	大阪クラブ	
34	昭29 1954	慶応BRB	東洋工業	
35	昭30 1955	全関学	中大クラブ	
36	昭31 1956	慶応BRB	八幡製鉄	
37	昭32 1957	中大クラブ	東洋工業	
38	昭33 1958	関学クラブ	八幡製鉄	
39	昭34 1959	関学クラブ	中央大学	
40	昭35 1960	古河電工	慶応BRB	
41	昭36 1961	古河電工	中央大学	
42	昭37 1962	中央大学	古河電工	
43	昭38 1963	早稲田大学	日立本社	
44	昭39 1964	八幡製鉄	古河電工	
45	昭40 1965	東洋工業	八幡製鉄	
46	昭41 1966	早稲田大学	東洋工業	
47	昭42 1967	東洋工業	三菱重工	
48	昭43 1968	ヤンマー	三菱重工	

関東大学リーグ	
回	優勝
20	早稲田大
21	早稲田大
22	東京帝大
23	早稲田大
24	早稲田大
25	早稲田大
26	慶應義塾
27	東京教育大
28	立教大
29	早稲田大
30	早稲田大
31	早稲田大
32	早稲田大
33	立教大
34	早稲田大
35	中央大
36	中央大
37	早稲田大
38	明治大
39	早稲田大
40	早稲田大・中央大
41	早稲田大
42	東京教育大

全国高校選手権大会				
回	年度	優勝	準優勝	
25	1946	※8月末に招待大会		
26	1947	広島高師付中	尼崎中	
27	1948	鯉城	上野北	
28	1949	池田	宇都宮	
29	1950	宇都宮	小田原	
30	1951	浦和	三国丘	
31	1952	修道	韭崎	
32	1953	東千田・岸和田		
33	1954	浦和	刈谷	
34	1955	浦和	秋田商	
35	1956	浦和西	日立第一	
36	1957	秋田商	刈谷	
37	1958	山城	広大附	
38	1959	浦和市立	明星	
39	1960	浦和市立	遠野	
40	1961	修道	山城	
41	1962	藤枝東	浦和市立	
42	1963	藤枝東	明星	
43	1964	浦和市立	宇都宮学園	
44	1965	習志野・明星		
45	1966	秋田商・藤枝東		
46	1967	山陽・洛北		
47	1968	初芝	山陽	

友の会が生まれます。改めて気づきましたが、賀川さんの誕生日ですよ、12月29日は。このあたりの経緯をお聞かせいただきたいんですが。

神戸FC創設のころの話 (1970年前後)

賀川：誕生日はたまたまですね (笑)。

サッカーは、昔の神戸一中のように学校スポーツで強くなっていくやり方もあるけど、すそ野をどんどん広げて子どもたちに遊びを広げていこうということです。兵庫でサッカーを古くからやってきた連中が、もっと考え方を柔軟にして兵庫サッカー友の会を作りました。これは加藤寛さんのお父さん、加藤正信さん、お医者さんで、おそらく加藤正信先生が岡山から神戸へ戻ってきて、サッカーを盛んにするためには兵庫県全体に、神戸市全体にサッカーを広げていかなあかん、単に一つや二つの強いチームを作るだけじゃダメなんだと加藤正信先生のところで考えたのが兵庫サッカー友の会になり、社団法人神戸フットボールクラブの創立につながります。

中塚：キーパーソンとして加藤寛さんのお父さんが出

**1977年1月 全国高校選手権 首都圏開催
高校サッカーのテレビ放送**

**1977年8月 第1回クラブユース交流大会
(⇒日本クラブユースサッカーU-18選手権大会)
学校以外のクラブ組織の誕生・交流⇒JCY**

**1977年8月 第1回全日本少年サッカー大会
(⇒JFA全日本U-12サッカー選手権大会)
少年サッカーの普及と底辺の拡大**

**1972年 東京でFCジナン誕生
女子サッカーも徐々に始動
1980年 全日本女子サッカー選手権大会**

**赤き血のイレブン(1970~71日本テレビ)
キャプテン翼(1981連載開始、1983アニメ化)
漫画・アニメの影響**

**ダイヤモンドサッカー(1968~88、1993~96)
世界のサッカーに触れる機会**

**1986年5月 日本体育協会スポーツ憲章
⇒ サッカー界にプロ選手誕生
アマチュアからプロへ**

**1990年 第1回全日本ユースU-18選手権
(⇒2011年 高円宮杯JFA U-18プレミアリーグ)
学校運動部とクラブユースの交流**

**1996年 第1回JFA全日本フットサル選手権大会
フットサルの始まり ⇒ 2007年 Fリーグ**

てきました。事前のリハーサルでは賀川さんからこの辺りの話をかなり詳しくお聞きしました。打ち合わせの会を加藤さんのお宅でよくやっておられたということです。賀川さん、加藤さんのお宅ということとは、つまり病院ですか。

賀川：加藤医院ですね。お医者さんなので夜にも患者さんが来てね、先生はみんなとサッカーの相談しているときに往診の依頼が来たら、どちらかというとしぶしぶと出ていかれるので、本業おろそかにしてもしばしば困りますからと、我々も頼んだんですけど。本当に加藤正信先生という、行動力もアイデアもある先生がいなかったら、あのころに加藤先生がやってくださらなかったら、日本のサッカーの発展はもっと遅れていたと思いますね。先生の馬力のおかげで西日本にも東日本にもどんどん広がったわけです。これほど精力的にサッカーの活動をされた方も珍しかったと思います。

中塚：加藤寛さん、加藤さんのお宅でミーティングをやったようですが、ご記憶はおありですか。

加藤：私は、岡山でたぶん3歳か4歳ぐらいまで、兄と九つ違いなんですけども、兄が小学校から中学へ入るときにちょうど来たから、たぶんまだ本当に小さかったと思うんですね。その頃に神戸に戻ってきて父は神戸一中、神戸高校のサッカー部のところへ行って、いろいろ話をしてみたいです。私の家の、診察室の隣の部屋で、かなり夜遅くまでいろんなお話をされてたようで、私は離れというか、離れたところにいたので話の内容は全然わかりません。でもいろんな人たちが来て、サッカー関係者の人たちが来て、何かお話をされてるんだなという印象はありました。まさか自分がいまこうやって、サッカーでご飯を食べるようになるとは全く思っていなかったですね。

中塚：賀川さん、そのときに具体的にされていた話はどうのことだったのでしょ。少年のサッカースクールをやるという話ですか。

賀川：まず僕らは小学校のときからボールを蹴ってましたからね、どういう訳か。やっぱり子どものときからボール蹴らせないと。外国と試合をしたときに、むこうはボールに慣れてるけども、日本の子どもは慣れていない。まずそこから始めなきゃいかんという

ことから、ボールを子どもに蹴らせることが第一。それを正しいやり方で、体に無理なく、皆に広げていかなくちやいかん。せっかくサッカーが盛んになっても、子どもたちが病氣したり、いろんな横槍が入って、サッカーやりすぎると困るんじゃないか。そういうふうになってもいかなんというふうなことで。そういう点では、割合にセーブしながらね。加藤先生もお医者さんですから、そういうことも十分心得ておられて、割合にゆったりしたやり方で、それだけに幅広くやろうということになったんですね。

中塚：あとは神戸にスタジアムを作る話ですとか、神戸フットボールクラブでは身分による登録じゃなくて年齢による登録にした話とか。いまサッカー協会が取り上げている制度の多くが、加藤さんのお宅で議論されていたという話もお聞きしています。

賀川：サッカー協会が取り上げたというのはですね、デットマール・クラマーが東京オリンピックの前にやってきて、日本のサッカーを指導して、東京オリンピックでは一つだけアルゼンチンに勝ちます。クラマーがドイツに帰るときに、日本ではこういうことをやってほしい、続けてほしいと日本協会に言い残していったんですねですけども、それを実際一番早く手掛けたのが神戸の先輩たちなんですね。

中塚：具体的なお名前を挙げると、加藤正信さん、他は大谷四郎さん…

賀川：朝日新聞にいた大谷四郎さん。理論的な裏付けをきちんとするのが大谷四郎さんの仕事で、加藤正信先生の仕事はそれをばあっと全国へ。その前にまず神戸市役所の中でサッカーに関心を持たせるように、神戸市役所の中を動き回って、サッカーを盛んにするようにされたわけですね。

中塚：このように、神戸FCが典型だと思いますが、学校しかなかった戦前から戦後にかけての日本のスポーツ界に、学校とは違う仕組みでスポーツをする仕組みをまず立ち上げたというところに先見の明があったのではないかと思います。

加藤：そのサッカー学校を最初始めたときの主任コーチが岩谷俊夫さんという方で、岩谷さんも神戸一中出身で元日本代表で、東京オリンピックのとき

の強化本部長だったと思うんです。僕が中学3年生の時に神戸少年サッカー学校が始まって、神戸外大のグラウンドで最初の練習をしたのをいまでもはっきりと覚えてますね。岩谷さんの教え方が、とてもスマートでわかりやすく、いまも私は真似をしてるといふかね、クラマーさんもあるんですけども、そこがすごくサッカーを始めたときによかったなと思います。賀川さんそれでいいですよ。

賀川：これは神戸一中が体格も小さくて、師範学校は中学校に比べると年齢が2歳上ですから、年も取っているし体も強いと。それに勝つためにはボールを繋いでサッカーをしなくちやいかん。ボールを繋ぐためには、たくさん皆がボールを触って、たくさん選手がボールを触るといことはそれだけたくさん選手がうまくならなければいかん。ボールを止めた時にミスをすれば次につながりませんから。そういうことのないチームを作ろうと言われたのが我々の頃の神戸一中で、それが徐々に戦後になってその考え方が、神戸市のサッカーをやろうという志のある人たちに広まっていったんですね。そこから技術を大事にする、ボールをちゃんと扱うサッカーに移っていくわけです。

加藤：岩谷さんがときどき我々にお手本として、ボールをペナルティーエリアのところに置いて蹴って、はいこっちのポストの内側に当てるよと言って当てるんです。はい反対のポストって言って当てるんです。今度はバーに当てると言ったら当たって返ってくるんですね。その技術を見て、僕ら目を丸くしたっていうのは非常に印象深いですね。

中塚：実際そういうのを目の当たりにすると、すごく惹きつけられますよね。

賀川さんどうもありがとうございます。また終わりの方で賀川さんに改めてコメントをいただくところもあるかと思いますが、日本サッカーの始まりのところから2021年の今年まで、賀川さんにエピソードを挟んでもらいながら振り返ってみました。

ここからは神戸FCの流れで、加藤寛さんにお話いただければと思います。

参加してくださっている皆さん、なかなか発言の機会を用意できなくてすみません。話を聞いていただいて、感想でも構いませんので。チャットの方にお寄せいただければ幸いです。

日本サッカーのあゆみ②

—これからのサッカー環境

加藤 寛



社会的身分制度から年齢制へ

— JFA 登録制度の改革とクラブユース連盟の誕生

加藤：では少し加藤の方からお話をさせていただきます。いま賀川さんから神戸FC創設の話がありました。私に与えられたテーマは「東京2020、WEリーグ創設と、これからのサッカー環境」ということですが、東京オリンピック・パラリンピックについては川島さんが話をされますので、そこで一緒にお話できたらと思います。「WEリーグの創設とこれからのサッカー」については、これも後にさせていただいて、いま賀川さんからお話が合った神戸FCの創設のところから日本クラブユースサッカー連盟（JCY）が出来るあたりまでを、はじめに話させていただきます。

参考メモ

一般財団法人日本クラブユース連盟の歩み

- 地域クラブというサッカーの楽しみ方、U-12～U-18選手一貫指導体制確立へ
- 1974年8月、日本協会財団法人化・・・登録制度の変更 大谷四郎氏発案
「社会的身分制度から年齢制へ」
・・・学校部活動だけでなく地域クラブが協会に登録して公式戦に出場できる道が開かれる！
- 日本クラブユース連合（現一般財団法人日本クラブユースサッカー連盟）設立 大谷四郎氏発案
1978年4クラブ加盟「全国クラブユース選手権大会」よみうりランドでスタート
（参加クラブ：読売SC、三菱養和SC、神戸FC、枚方FC）
- 1982年全国クラブユース選手権大会、日本サッカー協会後援になる
連盟の名称を「日本クラブユースサッカー連盟」に改称
- 1884年愛知県高浜市で高浜カップ（日本クラブジュニアユース選手権プレ大会）開催
- 1985年日本クラブジュニアユース連盟発足（U-15年代）
- 1986年日本クラブジュニアユース選手権（U-15）大会始まる 開催地は長野県白馬村
- 1997年ユース（U-18）、ジュニアユース（U-15）年代の各連盟が合併し一貫指導体制確立
- 1993年 Jリーグスタート 「スポーツで、もっと、幸せな国へ。」Jリーグ百年構想
地域に根差したスポーツクラブへ一層の期待感生まれる。

13

JCYができたのは、日本サッカー協会（JFA）が財団法人になって、寄附行為で登録制度を変えたことがはじまりです。先ほども出てきた大谷四郎さんと平木隆三さんが定款のもとを作ったと聞いてます。それまでの日本のサッカーは、小学校、中学校、高校、大学、社会人と、社会的身分によって登録する制度でしたが、それを海外と同じような年齢別にしたということです。1種、2種、3種、4種という、いまのJFAの登録制度です。年齢制限がないのが1種で、18歳以下が2種、3種は15歳以下、当時は16歳以下でした。そういう年齢別になっ

たので、学校以外の地域のクラブが協会に登録をしてサッカー活動ができるようになりました。そういう考え方が最初に神戸FCにでき、JCYの誕生に至る背景があると思います。

兵庫サッカー友の会が1970年に法人化するんですけど、法人化の理由が、少年サッカーをさらに発展させるためにはボランティアだけでは運営できない。神戸少年サッカースクールをもっと発展できるように専任のコーチを入れようということになり、黒田和生先生に来ていただきました。滝川第二高校の黄金期を作られた先生です。筑波大学、当時は東京教育大学でしたが、卒業後に神戸に来ていただきました。私は2年後輩になりまして、大阪体育大学を出て神戸フットボールクラブの職員にしてもらいました。そういうところから大谷四郎さんは日本協会といろいろ話をして、財団法人化の時に登録ルールが変わっていったわけです。

そこで、神戸FCの中にもU-18年代のチームを作ろうということで、部員を募集しました。当時は選手を集めるのに苦労しました。最近は部活動が今後どうなっていくのか、またあとで話をしますが、当時は学校の先生方と地域とのコラボというのは、認められない時代でした。ただ日本協会のルールが変わることによって、次第に世の中の情勢が変わってきました。1974年がJFAの財団法人化で、その4年後の1978年にクラブユース連盟が誕生します。読売サッカークラブと三菱養和会、それに神戸FCと枚方FC、四つのクラブで東京に集まり、よみうりランドで「全国クラブユース選手権大会」を手弁当で始めたのが最初です。このときに「クラブユース連合」という組織を作りました。その後だんだんクラブユースチームができて、よみうりランドでやっていた大会に参加するようになり、1982年にクラブユースの大会に日本協会の後援が得られ「日本クラブユースサッカー連盟」となります。

中学生年代も地域のクラブとして JFA に登録できるようになり、愛知県の高浜市で U-15 のクラブが集まって交換会をしていました。そこで U-15 の連盟をつくらうということになり、1985 年に「日本クラブジュニアユースサッカー連盟」ができました。1997 年には U-18 と U-15 の連盟を合併して、6 年間一貫指導ができる体制を作ろうということ一つにまとまります。その後、クラブユース連盟がだんだん大きくなって来るんですけど、1993 年に J リーグがスタートして「スポーツでもっと幸せな国へ」のスローガンを掲げた「J リーグ百年構想」ができ、地域に根ざしたスポーツクラブを作りましょうというムーブメントが起きてきます。これは非常に大きなことだったと思います。U-18、U-15 の大会を自分たちで作って自主運営し、それに日本サッカー協会も後援し、最近ではクラブの大会を JFA がともに主催してくれるようになり、大きな支援をいただいています。

クラブユース連盟の取り組み—トップだけ・男子だけでなく、幅広い層への広がり

参考メモ

一般財団法人日本クラブユース連盟の歩み (続き)

～ 2nd Division を育成する大会 (インターシティカップ) 始まる ～

- 2000年 JCY 中日本クラブユースサッカー選手権大会 (東海・関西・北信越) 岐阜県飛騨市古川町でスタート・・・
- 2004年～2009年 「JCY インターシティカップ in HIDA」 JCY 主催、後援: JFA・J リーグとなる。 U-18 と U-15 大会を開催。街クラブの活性化と育成目的。
- 2004～2013年 JCY インターシティカップ中日本
- 2005～2013年 JCY インターシティカップ西日本
- 2013年 JCY インターシティカップ (U-15) 東日本大会始まる
- 2014年 JCY インターシティカップ (U-15) WEST・EAST と改称 (西日本 6 地域へ拡大)

加藤: その後クラブユース連盟が何をしてきたかというと、トップレベルだけでなくセカンドディビジョン、例えばクラブユースの大会の予選で負けた子どもたちにもチャンスを与えようということで、負けたチームを集めた全国大会を始めました。U-15 年代ではインターシティカップ、U-18 年代ではタウンクラブカップという名前で行われています。連盟に登録した人たちがみんなが活躍できるような場を作ろうという趣旨です。2000 年から飛騨高山で始めましたが、最初は J のクラブは「セカンドディビジョン大会なんか出るか」と言っていましたけど、最

近は J クラブでもクラブユース予選で勝てないクラブが出てきて、いまでは J クラブも喜んでインターシティに出て、そこでチャンピオンになることを目指して練習するようになってきました。

参考メモ

一般財団法人日本クラブユース連盟の歩み (続き)

～ JCY (U-18) 街クラブの大会 「JCY (U18) TOWN CLUB CUP」スタート ～

- 2017年11月 石川県能登でスタート
- 2018年11月 群馬県前橋市で開催
- 2019年12月 茨城県つくば市で開催
- 2020年12月 Jグリーン場で開催

～ 女子部門スタート ～

- 2015年～17年 JCY 「レディースフェスティバル」新潟県燕市開催 女子の普及育成に着手
- 2018年 JCY 「レディースフェスティバル U-18」前橋市で開催。
- 2019年 JCY 「XF CUP 第1回女子サッカー大会 (U-18)」前橋市で開催。 JFA が後援、株式会社アイズカンパニーが特別協賛社
- 2020年 JCY 「XF CUP 第2回女子サッカー大会 (U-18)」JFA と共催になる
- 2021年 女子の9地域連盟組織の構築へ 連盟女性理事の確保へ

それから、今年 WE リーグ、女子のプロリーグが始まったわけですけど、女の子たちも地域のクラブでサッカーができる環境を作ろうということで 10 年ぐらい前から議論を重ねてきました。そして 2015 年から 17 年まで新潟県の燕市で女子の普及のためのフェスティバルを開催し、2018 年からは JCY レディースフェスティバル U-18 の名前で群馬県前橋市で開催しました。2019 年の大会からはアイズカンパニーという会社が特別協賛となり、XF CUP 第 1 回女子サッカー大会 (U-18) の名で日本サッカー協会の後援事業として、2020 年には男子の U-18 大会と同じように JFA と JCY が主催となり、全国の地域クラブの女子チームのサッカー大会をはじめました。女子の方ももっともっと盛にしたいなと思ってます。

学校のスポーツの話が出ましたが、女子の場合は中学生年代の女子のサッカー部はほとんどありません。昔は神戸にも女子の部活がありましたけど、いま神戸市内になくなってしまいました。そういう意味でも U-12、U-10、そういうところが地域のクラブとしてやっていかないと継続できませんので、そういう環境作りを考えて、10 年ぐらい前から準備をしてきました。

もう一つご紹介したいのは、クラブユース連盟の中にクラブマネージャーズセミナーを作って、クラブマネージャーの養成、それから施設セミナーとって街クラブのグラウンド作りの事例を集めて発表し、J のクラブだけでなく街のクラブもグラウンドを、自分たちの本拠地を持って、これからサッカーをしていくべきだというような勉強会をやっています。

クラブユース連盟のあゆみ、約40年以上あるのですが、こういった流れできています。

これからの日本のサッカー環境

～ これからの日本のサッカー環境 ～

課題

- 1) 日本は「上意下達のスポーツ文化」を克服できるか？
- 2) 学校部活動と地域スポーツクラブとの連携は可能か？
JCY40年の歴史から・・・
今後の部活は、学校部活からの変形か、地域クラブの発展型か？
- 3) 指導者の確保は・・・都道府県FAでの指導者養成事業大切
- 4) クラブ運営組織は・・・法人格を！
- 5) 施設グラウンドの確保は・・・自前の施設か、公共施設か
- 6) 財務基盤は・・・会費収入のみでは限界

加藤：これからの日本のサッカー環境というところですが、一つは、先ほど賀川さんの話の中で、子どもの遊びのサッカーから、もっともっと広くしていかないといけないんだというお話がありました。サッカー、スポーツは元々遊びだと思うんですよね。ただ残念ながら日本の運動部活動は、明治の開国以来、士農工商の身分制度がなくなりましたが、当時の武士が非常に頑張って、明治維新では日本の国を守ったと思うんです。しかしそれ以降、武士以外の人たちにも教育を広げていこうとする中で、軍事教練的なものが体育の中に入ってしまい、それが上意下達の文化を日本のスポーツ文化の中に含んでしまったところがあるんじゃないかなと思います。ですが、今年のオリンピック・パラリンピックを見ていると、ずいぶん変わったな、日本のスポーツの考え方も変わってきてるなと思います。

欧米の、遊びとしてのスポーツ文化というところでは、例えば日本サッカー協会が広めてきたリーグ戦文化は、年間7～8か月、週末に、同じレベルの人たちとスポーツを楽しむ。これはまさに遊びの文化です。レベルの高い人たちと低い人たちがやっても両方とも面白くないんです。でも同じぐらいのレベルの仲間と、練習して成果を週末に試すことができるというのがリーグ戦の文化です。昔、賀川さんから聞いたんですけど、例えばいい選手を作っても、強いチームを作っても、リーグ戦は下のレベルから入っていくからなかなか全国優勝はできない。でもカップ戦だったら、1年で勝ち抜いていけばあっという間にチャンピオンになることができる。そうい

うのが勝ち抜き戦の楽しみ方の考えです。例えば天皇杯は、県のチャンピオンを決め、それが上のレベルで勝ち抜き戦を戦い、そしてJFLからJリーグJ3、J2、J1というふうに順次上がっていくことができます。そういうやり方で、カップ戦も同じレベルから順次上のレベルの人たちと競い合って楽しめるようなシステムになってるわけです。それは日本の武術の勝ち抜き戦とはずいぶん違う感覚だなと思ってます。

文科省やスポーツ庁が最近、学校部活動を地域のスポーツクラブに変えていきたいと言っています。学校の先生方の働き方改革、学校の先生が無給のボランティアで一所懸命指導されてきたものを、地域のスポーツクラブへ転換していけないかという時期に来てるんですね。最近、日本サッカー協会と打ち合わせをする機会がありました。これからは部活動とクラブユース連盟の融合が求められると思います。私はもう会長を退きますが、次世代の人たちは、学校の部活動も、地域のスポーツクラブとしてJCYで受け入れるような体制を作ってほしいなと思います。

「遊びのスポーツをもっと広めてほしい」というのと、「学校の部活と地域のクラブの連携をこれからしていくべきだ」ということに加え、「指導者養成」が本当に重要です。デットマール・クラマーさんがFIFAのコーチングスクールをされたとき、私は大学1年生でお手伝いに行きました。日本にコーチ学が生まれたのはそこからで、日本にもコーチング・ライセンスが生まれてきます。都道府県レベルでもちゃんと養成ができるようにしていかないと、とてもじゃないけど学校の部活の指導を支えることはできないと思います。もちろんサッカー界だけでは駄目です。指導者養成事業は非常に重要だと思います。

それから「クラブマネージャーを育てる」こと。サッカー協会もスポーツ協会もやっていますが、さらに充実させていくべきです。クラブ連盟がやっている施設セミナーですが、こちらも日本の中でサッカー場を作るのはすごく大きなお金がかかることです。しかし街クラブでも既に、自前の施設を持つクラブがだんだん出てきてます。不可能なことではありません。今後、公共団体と一緒に、クラブ育成を進めていくべきじゃないかと思います。

施設については学校の施設の管理運営を地域のスポーツクラブがしていくことが、これから出てくる

と思います。皆さんに提言したいのは、Jリーグに入るためのいろんな条件がありますよね。J1、J2、J3のライセンス制度です。これと同じように、街クラブがライセンスを取って、公共スポーツ施設を運営する優先権を得られるようなシステムを、日本のスポーツ界にぜひ提案したいと思います。施設管理者の勉強をした人やクラブマネージャーを置かなければならないとか、ライセンスを持った指導者がいないといけないということが必要です。学校の部活動は、教員免許を持った先生方が指導されています。それと同じように、こういうところでも指導ができるようなシステムにすべきじゃないかと思います。先生方は、学校のお給料とともに、地域のクラブからのパートタイムの給料が出る。両方もらってもいいような制度を国が認めるべきじゃないかなと、個人的には思っています。ヨーロッパでは当たり前で、ドイツの話を聞くと、学校の先生としてもらう給料と地域のクラブで指導して受け取る給料と両方もらっているとのこと。こういうのが普通になるようにしていかなないと考えます。

クラブを守り、育てるのは自分たち自身 — 自治意識をはぐくむことが必要

加藤：そのためにも、クラブが法人化して民主的な自治組織を作るべきだと思います。地域行政とも連携して進めていくべきです。民主的な自治組織が、クラブが永続していく上で大切なポイントになるでしょう。以前、賀川さんにお聞きしたのが、ハンガリーのウイペシュテツ・ドージャというクラブは何百年も続いているんですね。ブタペストかどっかで。そういう話を聞いて、では神戸のKR&AC（神戸外人クラブ）は、戦争のときにどうやってクラブを守ったのか。明治のころに始まって、第1次世界大戦、第2次大戦を経て、このクラブを誰が守ったのかと尋ねたら、それはイタリアだったりドイツだったり、同盟国の外国人がこのクラブを守ったんですと言われました。そうか、やっぱり自分たちのクラブは自分たちで守ることを考えないといけないんだな、ボールの蹴り方や止め方、それに慣れるということも大切ですけど、それ以上にクラブの自治、自分たちで育て、守っていくんだということ、子どもたちから教えるべきだと思います。それが自主・自立の精神、自治の精神につながるんですね。

こういうことをクラブユース連盟の中で、いろんな人たちに話してきましたけど、自分たちのクラブは自分たちで運営していくんだという考え方が当たり前になるようにしないといけないと思います。

ドイツでは、「スポーツクラブは民主主義の学校」だと言われてるそうです。日本の地域クラブも「民主主義の学校」と言われるように、これからなっていくってほしいなと思います。私は、これを「これからの日本のサッカー環境への提言」とさせてもらいたいと思います。

WE リーグ創設と日本の女子サッカー

加藤：最後に WE リーグのところを少しだけ。

WE リーグの理念は、「女子サッカー・スポーツを通じて、夢や生き方の多様性にあふれ、一人ひとりが輝く社会の実現・発展に貢献する」です。

ビジョンに掲げるのが、「世界一の女子サッカーを。世界一のアクティブな女性コミュニティへ、世界一のリーグ価値を」です。

WE リーガークレド、クレドとは約束ということ、私たちは約束しますということです。

[WE PROMISE

- ・私たちは、自由に夢や憧れを抱ける未来をつくる。
- ・私たちは、共にわくわくする未来をつくる。
- ・私たちは、お互いを尊重し、愛でつなげる未来をつくる。

みんなが主人公になるためにプレーする。」これだけです。

ステートメントとして、

[STATEMENT

#これは新しい日本のキックオフだ

日本初の女性プロサッカーリーグ、WE LEAGUE。それは、世界レベルのサッカーが繰り広げられるリーグであると同時に、

すべての人が輝くためのコミュニティでもあります。ここから、性別に囚われない夢の抱き方が生まれる。ここから、多様な生き方への可能性が生まれる。ここから、あたらしい幸せのあり方が生まれる。プレーでも、社会への貢献でも、世界一の女子サッカーを目指していくリーグ。

WE LEAGUE。2021年9月12日に開幕しました。]

「WEリーグ創設とこれからのサッカー環境」

WEリーグの今後の課題：「観て、応援して、ワクワクするサッカーを！」（加藤）

*競技レベル

- 1) 女子選手の選手発掘育成システム、一貫指導体制を地域とプロクラブでどう作るか？
女子のエリート選手の育成をどのようにシステム化するか？
- 2) JリーグのようにWEリーグ2部、3部を組織化出来るのか？
- 3) U-18年代、U-15年代の競技会の整備
年代別、レベル別リーグ戦の組織化、年代別カップ戦の組織化（JFAとJCY、WEリーグ）

*財務基盤

- 4) 地域のスポンサー企業獲得
- *地域貢献（地域コミュニティとの結びつき・・・キーワードは「つながる」）
- 5) 観客動員へプロクラブは、地域コミュニティとどう連携すべきか・・・？
地域の（多世代型）スポーツクラブとプロ組織をどう組織化するか？
・・・ドイツ型（社団法人型）か、イングランド型（株式会社型）か？

私は INAC 神戸の開幕戦を見てきました。スライドにも書きましたが、「観て、応援して、ワクワクするサッカーを！」してほしいと思います。そのためには、いい選手を発掘するシステムを、各プロクラブが作らないとできません。一貫指導体制を地域の協会とプロクラブでどう作るか。女子のエリート選手の育成をどのように日本サッカー界の中でシステム化していくのか。そしてJリーグのようにWEリーグにも、2部、3部の組織化が将来できるのだろうか。いまWEリーグの下にはアマチュアの「なでしこリーグ」がありますが、2部がなくなっちゃったのかな。そういうものを地域リーグまで繋げていく組織をどうしていくか。そして、U-18年代、U-15年代の競技会。サッカー協会が整備する競技会と、クラブユース連盟がWEリーグと一緒に作っていき競技会を、これから整備していく必要があるんじゃないかなと思います。

もう一つ重要なのは財務基盤です。WEリーグの各クラブの財務基盤を、スポンサー企業の獲得、これはすごく大きな問題じゃないかと思います。スポンサーに繋がるのは、地域貢献、地域コミュニティとの結びつきだと思います。キーワードは「繋がる」。例えば、なぜINAC神戸と地域の私たちが繋がっていくのか、選手と企業が繋がっていくのか、そういうことがとても重要になってくると思います。それがひいては、観客動員に繋がります。観客動員が増えてくると、さらにスポンサーがついてきて、お金もついてきます。

クラブの作り方ですが、ドイツ型かイングランド型か。社団法人型がドイツで、株式会社型がイングランド。私もイングランドに4年前に行ってロンドンで見えてきましたが、イングランドの協会って株式会社なんですね。クラブもほとんどが株式会社で、地域のクラブも、地域のオーナーがお金をボンと出してグラウンドを作り、株式会社の取締役は地域の人

たちがボランティアで取締役をやっている。そんな株式会社があるのかってちょっとびっくりしたんですけど、ドイツの社団法人型とも違うイングランドの形をみて、それも参考になるのかなあと思いました。

これからのサッカー環境、日本のサッカー環境はどんどん変わっていくというか、発展していくんじゃないかなと期待しています。ありがとうございました。

中塚：どうもありがとうございました。賀川さんの話を受け継ぐ形で、神戸FCの立ち上げのところからクラブユース連盟がどのようなことに取り組んでこられたのか。学校とは違う仕組みを作ったというだけではありません。最初はチャンピオンを決める競技会しかありませんでしたが、インターシティやタウンクラブといった、交流を主眼とする、同レベルが行き来できるような大会を創設されました。さらに男子だけでなく、育成年代の女子のサッカーにも取り組まれていることが紹介され、WEリーグについても改めてご確認いただきました。本当にいろいろなことを加藤さん、やってこられたですね。

加藤：時間かかりましたね（笑）。

中塚：私もクラブユース連盟でU-15とU-18が統合した1997年のあたりから理事としてお手伝いさせていただきました。例えばヴィヴァイオ船橋の問題。あのときは「学校運動部の補欠をなんでクラブユース連盟で面倒みなあかんのか」という意見が出たり、いろいろありましたね。クラブの姿はいろいろあってよいのだろーと思います。けど、加藤さんがおっしゃいましたが、民主的な運営、自分たちのクラブは自分たちで守るという自治意識。これは学校であろうが街クラブであろうがJのクラブであろうが、本当はそこが一番大事なんだろうということを改めて思いました。ありがとうございます。

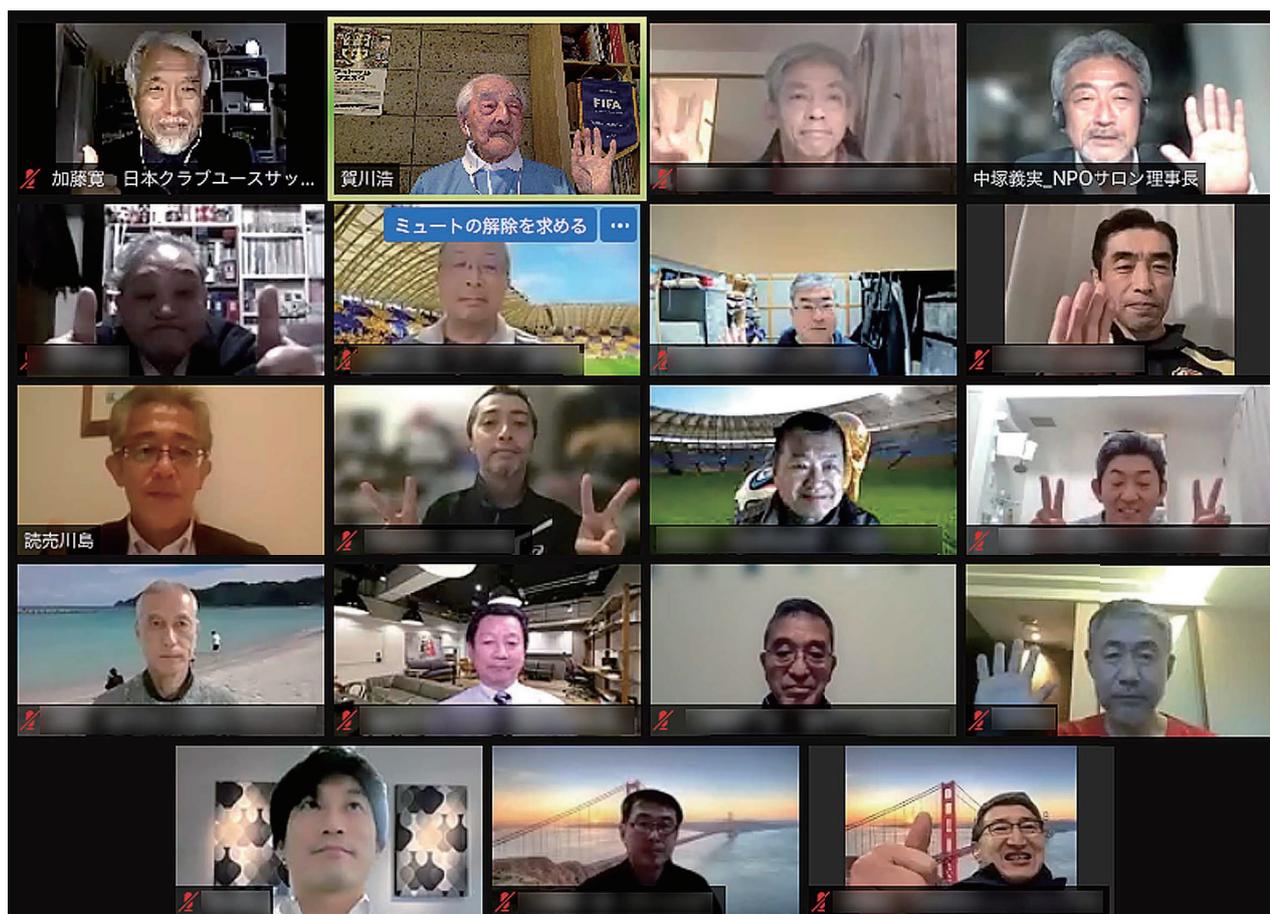
川島さん。加藤さんの話を聞かれて何かコメントありましたらお願いします。

川島：貴重なお話をありがとうございました。私、先ほど中塚先生のご紹介にありましたように、全国高体連研究部の活性化委員会に出させていただいています。学校の部活で熱心に取り組まれている先生、

たまたま昨日も高体連の先生とメールのやりとりをしたんですけど、いま問題になっている部活動の外部指導員による指導の話。いまの部活動がサステナブルなものかというとなかなか難しいところがあると思いますが、ただその先生がおっしゃるには、単に外部の指導員に任せればうまくいくのかっていうと、それほど簡単なものではないよというお話でした。加藤さんのお話で印象に残ったのは、地域のクラブのライセンス制度のお話です。Jのライセンス制度のような資格認定制度を作り、そういうクラブに例えば学校施設の運営管理の優先権を与えるというのは、やってみる価値があるというか、進むべき方向なのではないかと思い、勉強になりました。ありがとうございます。

中塚：どうもありがとうございます。皆さんからもチャットの方にご意見、感想がいくつか上がってきております。本当はここで時間をとってじっくり意見交換したいところではありますが、今年あったもう一つの大きなトピック、東京オリンピック・パラリンピックを後半戦で取り上げたいと思いますので、一旦ここまでの話はひと区切りとさせていただきます。ご意見、ご感想、ご質問等はチャットの方に遠慮なくお書きください。たったの5分で申し訳ありませんが、小休止をとって、17時15分から再開します。

(P.29 へ続く)



公開シンポジウム 2021-②：JFA100周年 2021年の総括と展望
2021年12月11日 集合写真

2021年12月

公開シンポジウム2021-②

JFA100周年 2021年の総括と展望-TOKYO2020、WEリーグ、そしてコロナ後へ

TOKYO2020をめぐる報道を中心に

川島 健司

(p.22 から続く)

中塚: ここからは川島さんに、スライドを用いて東京オリンピック・パラリンピック、この夏あった大きなできごとについてご報告いただきます。いろんな論議を巻き起こしました。いいか悪いかの2択の話でなく、多様な視点が今夏のオリパラの議論から見えてくる。もしかするとWEリーグのポリシーに繋がるメッセージを引き出せるのかもしれない。川島さんに話題提供いただき、最後皆さんで意見交換できればと思います。では川島さん、お願いします。

TOKYO 2020 を振り返って

ー報道側からみえること

川島: 改めまして皆さんこんにちは。もう今晚は、です。川島と申します。先ほど中塚先生からもご紹介いただきましたが、読売新聞で編集委員をずっとスポーツの畑でおりました。中塚先生先は筑波大附属高校の先生ですが、私はその学校の卒業生で、サッカー部のOBです。残念ながら中塚先生と二つしか年が違わないのでご指導を受けてはいないのですが、今日ご参加されてる方の顔ぶれをみると、私の中学・高校時代の同級生がいたり、指導者資格を取りに行ったときにご指導いただいた北原由先生が参加されていたり、あるいは私、世田谷区に住んでいまして小学生年代のクラブのコーチをやっていますが、よく相手チームで対戦している日本サッカー史研究会の佐藤さんが参加されていて、私の普段の悪行三昧を見ている方々がいらっしゃるのでもやりにくいんですが、今日はオリンピック・パラリンピックの話を見せていただければと思っております。

私自身はオリンピックの取材は今まで4回行っています。1994年、冬のリレハンメルでオリンピックの取材にあたり、98年の長野、それから夏でい

うとシドニーとアテネを取材しています。私にとってIOCの取材で一番印象に残っているのは、1999年、当時私はロンドン駐在でしたけど、そのときにIOCは2002年の冬季オリンピック、ソルトレークシティ招致に絡んで大変なスキャンダルになりまして、結局IOC委員が何人か追放されるという、IOC始まって以来の不祥事がありました。その取材でロンドンからずっとIOCの本部があるスイスのローザンヌに行ったのが一番印象に残っております。

今回のオリンピック・パラリンピックには、東京オリンピック・パラリンピック準備室というのがありまして、そこの室長として参画しておりました。どんな仕事かということ、これだけ大きな大会でするので人の配置をどうするかとか、紙面は何ページぐらいとればいいのかとか、号外はいつ発行するのかとか、そういうことで社内の調整をやっておりました。

初めにお断りしておかなければいけないのは、今から申し上げる私の話は基本的には個人的な見解です。新聞社の、社としての公の意見や主張ではないということをお断り申し上げておきます。

開幕までの紆余曲折

1) なぜ東京開催だったのか

ー東日本大震災と東京招致

川島: まず開幕までの紆余曲折について、なぜ東京開催だったのかという話から振り返りたいと思います。最初にこの話が出たのは2005年、当時の石原慎太郎都知事が、東京でオリンピックをやりたいと言ったのが始まりです。2020年ではなく、2016年の夏季五輪の招致でした。発展途上にある国とは違い、成熟した都市の姿を世界に示すという言い方をされましたが、同時に石原都知事は、改めて日本

の存在をアピールしたいとおっしゃっていました。ちょっと国威発揚的な部分もあったと思います。2016年の招致はご存知のように失敗したわけですが、2度目が2020年の招致で、東京開催が決まったのは2013年です。その2年前に東日本大震災が起き、ここで招致の性格が変わったような気がしています。つまり震災があった、原発事故も起きたということで、日本は大丈夫なのかとIOCの人たちは思うわけですが、それを逆手に取るような形で「復興五輪」を言い出します。ブエノスアイレスのIOCの総会では佐藤真海さん、いまは谷真海さんですが、感動的なプレゼンテーションをされて招致にこぎつきました。ここからちょっと東京大会の性格が変わってしまい、本当に大会の開催が復興に繋がるのかというよりも、とにかくやるんだという感じになってしまったと思います。

2) 二つの白紙撤回

－新国立競技場問題と大会公式エンブレム

川島：もう一つ、大会が始まるだいぶ前に起きた残念な出来事が、二つの白紙撤回です。2015年の夏に新国立競技場のデザインが白紙になったことと、大会公式エンブレムが、発表されたと思ったらこれも白紙になったということです。国立競技場のデザインは当初、ザハ・ハディドさんというイラク出身の女性の建築家のデザインで行くはずでしたが、すごく大きな建物で70mぐらいの高さがあります。これが神宮の森に合うのかという問題があり、また、1300億円ぐらいの予算で作る予定だったものが実際に作るとなると3000億円ぐらいかかる、2倍以上の経費となり、世論の反対もあって、結局ザハ・ハディドさんのプランは白紙になりました。改めて応募して選ばれたのが、隈健吾さんという建築家が作られたデザインだということは皆さんご存知だと思います。大会公式エンブレムも、作ったはいいけどベルギーの劇場のマークに似ているというクレームが入り、使用差し止めの裁判が起こされます。当初、組織委員会は商標などのチェックもしているので大丈夫と言っていたのですが、デザインされた方が、大会公式エンブレムを埋め込んだ写真をこのように使えますよということで、空港や鉄道の駅の写真を発表したんですが、その写真の使用を無許可でやっていたということがありました。結局、新しいデザイン、皆さんご存知の市松模様の綺麗なデザインに変わりました。

どちらの問題も、責任の所在がはっきりしない。新国立に関していうと、有名な安藤忠雄さんという建築家が審査委員長を務められ、実際に決まったのですが、値段のことまでは私は知らなかったという話になりました。そもそも国立競技場を管理する日本スポーツ振興センターは、こういった巨大な建築物の発注などをしたことがないわけです。その時点で無理があったのではという声がありました。大会公式エンブレムについても、組織委員会の審査が甘かったのではないのかという意見があり、もちろんデザイナー個人の問題でもあります。責任の所在がはっきりしない。こんなことで本当にオリンピックができるのかとの不安を持った方も多かったのではないかと思います。

3) コロナがすべてを変えた

川島：それにさらに追い打ちをかけたのがコロナでした。これは3月25日の読売新聞の一面です。東京五輪1年延期が決まったちょっと前、コロナが深刻化し始めた頃から、やるべきじゃないというような意見が、選手のSNSなどでどんどん出されていましたが、最終的には、写真が出ているように当時の安倍首相が決められたという感じでした。IOCのバッハ会長もそれに合意したという感じです。本当だったら、オリンピックの開催権は都市に与えられるので、東京都、あるいは日本オリンピック委員会がもう少し中心になって前面に出てきてよかったと思うのですが、決めたのは首相でした。首相は何を一番恐れていたのかということ、延期じゃなくて中止になってしまうことだけは避けたかったということです。1年延期を決めたということでした。

決めたのはいいんですが、1年後にまた開くためには、例えばメインプレスセンターがある晴海のビッグサイト、あるいは競技会場の一つである幕張メッセなどは、いずれも国際見本市などの予約がたくさん入っていて、それを全部キャンセルしていかなきゃいけないという大変な難題を抱え、当然経費も増えるということで、そこからまた苦労が始まります。

1年延期しましたが、コロナは残念ながら収まらず、2021年3月に海外からの観客を断念します。同じ3月には、始まってすぐ中断されていた聖火リレーをまた再開したんですが、感染拡大の危険があるということで、4月から公道で聖火リレーをしない、中止が相次ぐ、ということになってしまいました。

た。もうこんなんで本当にオリンピックできるの、という声が出始めて、21年度の5月末には開催は中止すべきだというような社説を出すような新聞社も出てきたわけです。

メディアはどう報じたか

川島：メディアは大会に向けた動きをどう報じてきたのかについて述べます。この記事は今年の9月、パラリンピックが終わってすぐに読売新聞で大会を振り返る検証を連載で4回やりましたが、その中の一つです。見ていただきたいのは鈴木一人さんという東大教授の意見です。興味深い指摘をされています。皆さん覚えてらっしゃるかと思いますが、リオ五輪の閉会式で安倍首相がスーパーマリオの格好をして土管から出てきました。あれは森喜朗大会組織委員会会長のアイデアだったそうですが、なかなか受けは良く、海外でも評判でした。あれで安倍さんが前面に出てきたことで、この東京大会は「安倍プロジェクト」の色合いが強くなったと。すると安倍さんを快く思わない人たちが東京五輪を攻撃のターゲットにした側面があったのではないかということ。鈴木先生は指摘されています。安倍さん、菅さんのプロジェクトだからダメだという論理になり、オリンピックで外国人が来たら感染爆発が起こるといような行き過ぎた資料も出てしまったということ。鈴木先生は記事の中でおっしゃっています。

他にも、2月に森会長が女性を蔑視すると受け取られかねない発言がありました。大変残念な発言で弁解の余地はないと思うんです。ただ唯一良かった点があるとすれば、新会長に女性の橋本聖子さんがなられて、組織委員会の構成も女性が多く起用された部分では良かったかもしれません。IOCの幹部への批判もたくさん出ました。バッハ会長は4月、緊急事態宣言が再発令される事態に、「それは日本政府が予防的措置、ゴールデンウィークを控えているので感染拡大防止のためにやってることで五輪とは関係ない」という発言をされました。5月には、IOCと東京組織委員会のつなぎ役となる調整委員会の委員長であるコーツさんというオーストラリアの方は、「こんな状態でオリンピックができるのか」という質問を受けて、「絶対にできる」という言い

方をしています。IOCは商業主義だとか拝金主義だということで非常に批判を受けましたが、実はIOCという組織は、収入のうち9割は国際的な競技連盟や各国のオリンピック委員会に再分配しており、パラリンピックについても、オリンピックと同じ会場を使うので、IOCが協力しているからパラリンピックができやすくなっています。けれどこういう説明は日本向けにはあまり為されておらず、IOC＝拝金主義というような批判が出ていたので、ある意味で無神経な回答であり、日本の人たちの神経を逆なでするような発言が出たのはとても残念だったと思います。

鈴木先生は、本当に世論が二極化してしまって、政治利用がされてしまったと言われています。政治利用とは、一つには10月で衆議院の任期が切れることはわかっていたので、大会直後のおそらく9月には選挙があるだろうということで、当然菅首相はオリンピック・パラリンピックの成功を追い風にしたい、一方はそうはさせたくないというせめぎ合いがあり、どちらも政治利用したところがあった気がします。

非常に難しい問題ですが、そんな印象を受けました。

新聞社にとっての東京大会

1) 大会オフィシャルパートナーとは

川島：ここで少し話は変わって、「新聞社にとっての東京大会」についてです。日本の新聞社、そのうち全国紙といわれる新聞社が、揃って大会のオフィシャルパートナーになっていたことは皆さんお聞きになったことがあると思います。私ども読売新聞社と、朝日新聞社、日本経済新聞社、毎日新聞社が2016年1月、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会と、新聞という分野でのオフィシャルパートナー契約を結びました。結ぶと何ができるかということ、当初は2020年末まででしたが、東京五輪のマークなどを宣伝活動に使えるというものです。

オフィシャルパートナーは、もっと高い値段を払っているゴールドパートナーの次のカテゴリー、位置づけになっています。普通は一業種につき一社のみ。その方が効果があるのでこのようになってい

ますが、最初にこの4社が入り、後になって一つ下のカテゴリーに産経新聞と北海道新聞も入ることになりました。大会組織委員会としてはとにかくスポンサーを増やしてできるだけお金を潤沢に用意したいというのがあったんだと思います。

2) 聖火リレーをどう伝えるか

川島：新聞社が、例えば聖火リレーをどう伝えたかという話です。毎日聖火ランナーは数十人、100人以上走るもので、私どもの新聞社では各地方、例えば山梨で走る場合は山梨県の県版、地方版の記事に全員のお写真とお名前を入れることをしました。どうしてそんなことをするのかというと、やはり新聞社も事業ですので、読者を獲得する貴重な機会になると。つまり家族なり本人が新聞紙面に載っていたら、「新聞とってくれないか」という話がしやすいということやっておりました。

私のところはオリンピック・パラリンピック室、準備室という名前でしたが、社内には別にオリンピック・パラリンピック事務局という部署もありました。会社によってはオリンピック・パラリンピック戦略室という名前で置いているところもありました。「何でオリンピック・パラリンピックが戦略なの？」という話ですが、いま言ったように、例えば聖火リレーの報道などで広告を集めたり、新聞の販売部数を増やしたり、そういうことを考える側面も新聞社にはあります。地元でやる五輪は半世紀に1回、なんせ56年ぶりの五輪ですから、それをビジネスのチャンスにも使いたいという部分が新聞社にはあったということです。契約料もなかなかの高額で、ウン千万という単位ではない額ですので、当然有効利用しようという感じでやっていたのは間違いありません。

3) IOC、JOC、大会組織委員会との関係

川島：ただ一つ申し上げておきたいのは、例えば東京の組織委員会やJOCから、「組織委員会ちょっとおかしいじゃないか」とか「だらしがないじゃないか」というような批判的な記事を書くことについて、オフィシャルパートナーだからといって「書いてくれるな」というようなプレッシャーがかかることは一切ありませんでしたし、逆に「これを書いてくれないか」というものもありませんでした。これはIOC、国際オリンピック委員会もJOCも同じです。そして社内の、例えば私どものオリンピック・パラリン

ピック事務局が社長室直属であるんですが、そこから「この記事を書いてください」とか「書かれると困る」というような話が来たことも一切ありませんでした。おそらくどの社も同じだと思います。そこは編集局、ジャーナリズムとして譲ってはいけない部分です。

これから先、新聞社がスポーツの大きな大会、国際大会にパートナーで入ることはあると思いますが、そこは変わらないんじゃないかと思っております。

開幕にあたって

1) 無観客での開催決定

川島：7月5日になって、東京周辺の1都3県では原則無観客で行うことが決定しました。当初は1万人を入れる話もありましたが、原則無観客です。どのように運営するのがいいだろうかと、我々も悩みに悩んだというのが本当のところなんです。専門家のご意見も聞きたかった。よその新聞社も同じだったと思います。

日本記者クラブという組織がありますが、6月に、何人かの専門家を連日のようにお一人ずつ招いて記者会見がありました。いろんな方の話を伺っていて、個人的に一番しっくりきたのは、奈良女子大准教授の石坂裕司さんのご意見です。中止をしようとなつてしまうとあとに何も残るものがなくなってしまふ。でもお客さんをお呼んだら必ず人が集まってしまうから、感染拡大に繋がる可能性がある。無観客なら何とかできるんじゃないかというご意見です。自分の感覚に合った気がしました。この方は長野オリンピックの後に現地調査をされたそうですが、五輪から10年たったとき、お年寄りがカーリングを楽しんでいたという話をされました。建物ではありませんが、ソフトなオリンピックのレガシーでしょう。中止になってしまうとこういうものは残らないというようなお話で、なるほどと思った記憶があります。

2) メダル号外をどうするか

川島：右側にあるのは、9月になって大会が全部終わった後で号外を集めたパネルです。私どもの新聞社では今回、金銀銅のメダル取るたびに一つずつ、メダル号外を作りました。オリンピックで62枚、

パラリンピックで53枚。これ1枚だけじゃなくて3ページにわたっています。出しまくったんです。よくテレビで「号外、号外」って配ったところが紹介されますが、配ってないものが大半です。作るとは作んですけど、PDF化して、例えばその選手の出身地の販売店にPDFとして送り、地元では配ってもらうような展開をしました。輪転機で印刷して出す号外は、最初ちょっとためらってありました。やはり読者の皆さん、日本の一般国民の皆さんがコロナで苦勞されてるときに、街の中で、例えば銀座の数寄屋橋の交差点あたりで「号外です」って配ったときに、「お前、このご時世に何やってんだ」って言われて、「すぐにやめろ」と言われることがあるんじゃないかと。そうになったらすぐにやめようという話にして、配るのは最初控えていました。けれど大会が進むにつれて、意外に好意的に受け止められていることがわかり、最後の方は輪転機を回して、金メダルについては号外を配りました。

大会が進むにつれて国民の皆さんの意識も変わってきたなというところが、我々の感覚でした。

3) 現場の記者たちが考えていたこと

川島：現場の記者たちがオリンピック開幕前にどんなことを考えていたかという話です。私などは会社の中にずっと閉じ込められた籠の鳥で、朝から晩まで社内にいるんですけど、現場に出て取材にあたる記者も、その原稿を見るデスクも、私のような者も、もうちょっと上の会社の幹部も、かなり頭にきたような記事が一つありました。よその会社の記事ですけど、コロナ禍で練習できない人、中には来られない選手もいる。「最高の大会からはほど遠い大会になる」と書いた記事です。私の感覚では「それはないだろう」と。1年延期になった中で一所懸命準備し、大会に臨む選手には、何の罪も咎もないわけで、「そんなことをあなた、選手の前で言えますか」というのは、我々皆が感じたところでした。

我々スポーツ担当の記者は、賀川さんみたいな大先輩の前で偉そうなこと言うのは恥ずかしいんですが、時には厳しいことを、特にプロスポーツの場合には書くこともあります。でも我々が先輩から習ってきたのは、どこかに救いを持たせてやれよ、その記事の次にまだ挽回の機会があるのだから、どこか救いを持たせる記事にしろ、とことん追い詰めるような記事にするんじゃないよと。たとえ批判をする場合でも、当事者、批判されている選手の前で読める

ような、その程度の内容にしておけよというのを、新米の頃にずいぶん教わりました。「こんな大会は最高レベルからは程遠い」みたいなことは、あまりにも選手へのリスペクトに欠けるんじゃないか、こういう記事だけはうちの新聞社からは出さないようにしようねというような話をした覚えがございませう。

東京大会が残したもの

1) 世論の変化と意思決定者の発信不足

川島：駆け足ではありましたが、最後に東京大会が残したものという話をさせていただきます。

8月10日、オリンピックが終わった時点で一度うちの新聞で検証記事を書きました。オリンピックの開幕直前まで世論は真っ二つでした。無観客開催が決定し、開会式まで2週間となった7月9日から11日まで、私どもで行った世論調査では全国で41%、東京では50%の人が中止がよいとおっしゃっていました。それが8月7日から9日、オリンピックが終わるころの世論調査では64%の人が開催されてよかったと思うと答えました。

ただ面白いのは、それでも内閣支持率は、菅首相が期待したようには上がらないで、結局パラリンピック閉幕の頃に退陣を表明することになりました。これについて、先ほどご紹介した鈴木一人教授は、オリンピックが過度に政治化した最大の理由は、菅首相のメッセージ不足だということ为先ほどの原稿で言われています。「首相は<安全安心な大会を実現する>と念仏のように繰り返すばかりで、批判に対して、こういう理由で五輪を開きたい、安全安心とはこういう意味だ。といった具体的な説明が不足した。メッセージが足りないので批判はさらに過激になった」、そういう言い方をされています。

意思決定者の発信力不足というのは、先ほどの新国立の問題もそうですし、ずっとこの大会に最後までつきまとったことかなと思います。

2) 新たな動き

川島：もちろん新たな動きも出つつあります。IOCは12月9日まで理事会をやっていました。2028年の夏の大会はロサンゼルスに決まっていますが、そこでスケートボード、サーフィン、スポーツクライ

ミングを行うことを決めています。やっぱりスポーツを楽しむ姿勢、先ほど加藤さんの話にもありましたけど、まず遊びを楽しむんだというのが、あの三つのスポーツにはすごく感じられ、新たなスポーツの価値、軍事教練的な様子がほとんど感じられない、そういう価値に気づかせてくれた部分は、東京五輪の新たな動きじゃないかなと思います。

AIPS (Association Internationale de la Presse Sportive) という国際スポーツ記者協会という組織があり、会長さんはガゼッタ・デロ・スポルトというイタリアのスポーツ専門紙の人です。この人は、東京大会は成功だったという言い方を、AIPS の機関誌にしております。それから先日まで行われていた IOC の理事会で発表されましたが、17ヶ国、国と地域の 3 万 2000 人ぐらいを対象にした民間の調査では、65% の人が東京五輪は成功だったと評価しているそうです。テレビが、デジタルプラットフォームを合わせて 30 億 5000 万人が視聴した。そのうちの多くは、先ほど言ったアーバンスポーツだったということも、IOC の委員会で発表されています。

それから、これが実は一番大きな東京大会の残したものの、東京が変えたものだと思いますが、パラリンピックの見方が決定的に変わったと思います。残念ながら会場で直接見ることはできなかった人が大半でしたが、これほど長い時間、テレビ放映されたことはいままで日本ではありません。「パラの選手はカッコいい」という見方が日本でも広まったと思います。車椅子バスケットで大会の MVP に選ばれた鳥海連志選手は 12 月 2 日、今年のベストドレッサーというのが発表になりましたが、そのうちの 1 人に選ばれました。パラがかっこいいものになったと言えるでしょう。

これは、パラリンピックが日本で開かれたから起こったことであり、パラリンピックはオリンピックが開催されていなかったらおそらくできなかったと思いますので、そういう意味ではオリンピックもパラリンピックも開催できたことは良かったのではないかと思います。

3) メディアとして追っていくべきもの

川島: メディアとしてこれからどういうふうオリンピック・パラリンピックを追っていくかということです。新聞記事は、12 月 3 日付の読売新聞の一面です。これはたぶん独自ネタ、いわゆる特ダネだと

思うんですけど、東京五輪とパラの経費ですね。無観客になったことで、900 億円と言われていたチケット代が入らなくなって大赤字になると言われていましたが、無観客になったため、人件費を減らし、消毒などもやらなくて済んだので 1500 億円節約できて、公費の追加はなしで済んだという内容です。今回のオリンピックでは膨大な税金が使われており、やはり自分たちの払った税金がどう使われるのかは国民の最大の関心です。これから本格的な収支の発表などもあると思いますけど、そういうところはきちんと追っていききたいなと思います。

もう一つ、先月の終わりには、札幌市の秋元克広市長が記者会見をされ、2030 年の冬のオリンピックを招致したいと言われました。東京が終わったばかりで、何でもうオリンピックの招致だと思われる方もいるでしょう。もちろん札幌の市民の方にも、今回の東京の一連のゴタゴタをみて反対される方も多いと思いますけど、札幌市の主張は、できるだけ経費をかけない形で、いまある既存の施設をできるだけ有効利用しながらやっていきたいということです。IOC のバッハ会長は先日の理事会で、札幌は実質的にすべてが揃っており、東京大会とスタート地点が異なるという言い方で、聞きようによっては高く評価をするということを言われています。

ご存知の方が多いと思いますが、2028 年のロサンゼルス五輪の次、2032 年の夏季五輪の開催地がブリスベンで決まっています。東京大会が決まったのは 2020 年の 7 年前、2013 年だったんですが、これは当時の IOC の規則で 7 年前までに決めなければいけないというのがあったのでそうなったんですが、いまから 10 年以上先の夏のオリンピックの開催地まで決まっています。それなのに冬の方は 2030 年はまだ決まっていないという状況で、いつ決まってもおかしくない状況でもあります。オリンピックはもちろん見たい気もしますが、東京の反省点を生かしてやってくれるんじゃないかなと思ったら今回は嫌だよという声は強くなるような気がします。この札幌市の動きも、マスコミとしてきちんと追いかけていきたいと、そんなことを考えています。

非常に駆け足になりましたが、以上で私の話を終わります。ご清聴ありがとうございました。

2021年12月

公開シンポジウム2021-②

JFA100周年 2021年の総括と展望ーTOKYO2020、WEリーグ、そしてコロナ後へ

TOKYO2020をめぐってーまとめ

賀川 浩 加藤 寛 川島 健司 中塚 義実



まとめ

中塚: どうもありがとうございました。限られた時間でしたが、読売新聞の立場も含め、いろんな視点を提示いただきました。最後に言われていましたが、大会をやって終わりではなく、これを次にどう繋げていくか、その前に大会をどう検証するかということが、我々一人ひとりに求められてるんじゃないかということを感じながらお聞きしていました。せっかくですので加藤さん、賀川さんから、今回のオリンピック・パラリンピックについて、いまの川島さんのお話も含め、感じたことなどをお聞きしたいと思います。賀川さんはオリンピックをご覧になりましたか。

賀川: あの間はテレビにかじりついてましたね。

中塚: どうですか、このコロナの中での開催、選手たちの活躍、あるいはその後のことも含め、賀川さんはどのようなことを感じられたのかをお聞きしたいんですが。

賀川: やっぱりスポーツの大きな大会というものはいつもいいわけですけど、特にオリンピックのような総合的な大会が、テレビできっちり報道してくれるということは、我々スポーツを好きな者にとっては非常にありがたいことですよね。だからオリンピックそのものは、非常に皆に、オリンピック、オリンピックって言うから、どんなもんじゃろということで見えるわけですけど、実際やっている競技そのものはね、スキーであれば、ジャンプであったり滑降であったり回転であったりしてるわけで、それぞれの種目別の世界のトップの選手は、プレーをするということにはなるわけなんです。そういうもので、

やはりそれを総合的にみられるところにオリンピックのおもしろさがあると思います。やはり4年に1回、僕らは4年ではなくて2年に1回ぐらいやってくれたらいいと思いますけど(笑)、競技会を今年も楽しませてもらいました。

中塚: ありがとうございます。加藤さんいかがですか。

加藤: 実はオリンピックと同じようにクラブユースも全国大会があって、それをやるべきかどうかっていうのをクラブユースレベルの中でもいろいろ議論しました。結論から言うと、オリンピック・パラリンピックは、私個人は非常に感動しました。やっぱりスポーツの持つ価値は素晴らしいなっていうのを再認識しました。コロナが、人と人を分断したというか、仲の良かった人間も顔を合わさないうちになんとなく疎遠になってしまうみたいな、そういうところもあったのかなと思いますけど、スポーツはそれ以上に人と人を結び付けてくれる素晴らしい平和的なものだなと改めて感じました。

それが、ちょっとみんなが「ン？」と思うのは、政治利用される場所でしょう。すごい莫大なお金がかかるようになってしまったので、そのお金をどうやって引っ張り出すかというところで、どうしても政治家が出てくるようになってしまうのかもしれない。けど世界のスポーツ組織、FIFAもIOCも、そういうところが、これもあり得ないことかもしれないけど、お金の縛られるのではなくて、本当のスポーツの素晴らしさを追求していくにはどうしたらいいのかというのを考えてもらえないかというのが、正直なところ。僕の頭では実際わからないです。

クラブユース連盟の全国大会も、去年はやめて今年はやりました。正直コロナの疑いのある人が大会期間中に出て、そのチームは途中で帰ってしまいました。審判の中にも疑わしい人が出て、実際それは

擬陽性で大丈夫だったんですけども、そういうこともありました。けど、やってよかった。コロナを乗り越えて全国大会をやって、選手たち、スタッフ、保護者、いろんな人たちからありがとうございましたという感謝の気持ちを、みんなが何か手を繋がったというか、気持ちが繋がった大会になったと思います。そういう意味ではオリンピックも、みんなの心が、国民のみんなの心がスポーツで繋がった一瞬だったんじゃないかなと、私は思っています。

中塚：ありがとうございます。皆さんから感想やコメントいただきたいところですが、予定していた6時になってしまいました。それぞれ、今年あったこと、とりわけこのコロナの緊急事態の中であったオリンピック・パラリンピックをどう評価していくのかについては、やはりこれから、我々一人ひとりがそれぞれの現場でしっかり考えて検証して、次に繋げていかないといけないと感じております。

今回のシンポジウムで2021年ということ、無理やりかもしれないけど取り上げたのは、JFA100周年であることとともに、この年が、コロナのパンデミックの中で、いろんな分野で、大きな転換点になるんじゃないかなと思うので、あえていろんな話題を盛り込んで企画しました。参加された方のコメントをいただく時間が取れなかったのは申し訳なかったのですが、集まって話題を共有しようということで、いろんな話題を取り上げました。

このあともし時間の都合が付く方がいらっしゃいましたら、飲み食いしながらざっくばらんに続きの御議論ができればなと思います。

加藤さん川島さん、どうもありがとうございました。

そして最後のコメントは、やはり賀川さんにいただきたいと思います。コロナで、加藤さんもおっしゃいましたが青少年の大会が失われたり活躍の場が奪われています。コロナです。賀川さんの場合は、一番サッカーやりたかったときに戦争と重なりました。そういったご経験から賀川さん、アフターコロナへ向けて、我々にメッセージをいただくとありがたいんですが、いかがでしょうか？

賀川：私のように、ほとんど100年近く生きてきますと、世の中にはいろんなことがあって、何でも起こりうるわけですけど、何でも起こりうる中で、ス

ポーツというものは、もっとも楽しい日常の楽しみの一つですよ。やるについても見るについても語るについても、すべてスポーツについて、我々の生活はそこに持っていくと非常に楽しいことになりまますから。そういうものがこれからも続いていけるように、スポーツの関係者の皆さんも、いろいろと応援していただかなあかん。よろしくお願いします。

中塚：どうもありがとうございました。賀川さんは今月29日で97歳ですよ。

賀川：12月29日がぼくの誕生日ですから。まあ27になるのかな、27か28、いや、97歳や(笑)。今まで戦争も含めてよう生きたと思えますけども、まだまだまだまだサッカーについては、いくらでも考えたり、話を聞いたりしたいと思っております。よろしくお願いします。